

被虐待経験と不安定愛着が情動調整不全を介して 心身の不健康や不適応に及ぼす影響

——青年期を対象とした大規模調査（CAASK²）の概要——

福井 義一

大浦 真一

松尾 和弥

I. はじめに

本稿では、2012年と2013年に関西地方の2つの私立大学で実施された大規模調査の概要について述べる。本調査では、青年期において被虐待経験と愛着が情動調整スキルや心身の不健康・不適応に及ぼす影響を検討するため、多くの変数を質問票調査と実験によって収集した。以下にその目的と概要、今後の展望について述べる。本稿では、以後この大規模調査のことをCAASK²（Child Abuse and Attachment Study at Kyoto & Kobe）と呼ぶ。

1. 被虐待経験が心身の不健康・不適応に及ぼす影響

被虐待経験が心身の不健康や不適応に悪影響を及ぼすことは経験的にも実証的にも知られてきたことである。DSM-V（APA, 2013）を繙くまでもなく、多くの精神疾患の背後に不適切な養育環境やトラウマティックな体験が想定されており、うつ、解離性障害、PTSD、反抗性挑戦障害、適応障害、病気不安障害、強迫性障害、社交不安障害、全般性不安障害、広場恐怖、パニック障害、転換性障害、反芻性障害、身体醜形障害、パラフィリア障害、素行障害、間欠性爆発障害、分離不安症、選択性かん黙、愛着障害など枚挙に暇がない。被虐待経験は、身体的な疾患や症候群に対しても精神的な不健康・不適応に対するのと同様に悪影響を及ぼしていることが知られており、エビデンスのあるものだけでも、筋痛症、機能性消化管疾患、偏頭痛、めまい、感染症、不整脈、扁桃炎、高血圧、内分泌系の障害、糖尿病、リンパ性の問題、慢性疲労、アトピー性皮膚炎、摂食障害、ぜんそく、睡眠障害、医療機関受診回数など、精神疾患に引けを取らないほどである。

ところが、我が国においては、被虐待経験と様々な心身の不健康や不適応の関連について調査した研究は少なく、その規模も非常に小さい。例えば、機能性消化管疾患の下位分類であり、心身症の中心的な疾患であると見なされている過敏性腸症候群（IBS）（日本消化器学会, 2014a）や機能性ディスペプシア（FD）（日本消化器学会, 2014b）の治療ガイドラインには、それぞれに対して被虐待経験などトラウマ体験がリスク要因として挙げられており、世界的にはエビデンスが蓄積されているが、我が国における調査報告は、現在においてさえ、筆者のもの（福井・松尾・大浦, 2016; Fukui, Matuso, Oura, 2016; 福井, 2016）以外には見当たらない。もちろん、調査実施当時はこうした研究は皆無であった。

そのような事情から、被虐待経験が心身の不健康・不適応に及ぼす影響について、体系的に検討する必要がある。

2. 本調査に至る背景（解離性障害の成因に関する研究）

第一著者は、解離性障害のクライアントの治療経験（福井・飯野・福井, 2007, 2008; 福井, 2008, 2011）からその成因に関心を持ち、無秩序・無方向型（D型）という愛着型が将来の解離性障害の脆弱性要因になる（Liotti, 1992; Liotti, Mollon, & Miti, 2005; Lyons-Ruth, 2003）ことを知った。そこで、被虐待経験のような発達早期の慢性的なトラウマが不安定愛着を形成し、解離傾向に至るという、解離性障害のいわゆる「外傷-発達論」（細澤, 2008）を実証的に検証してきた。その際、大学生を対象として横断的にアナログ研究（杉浦, 2009）を実施したため、質問票による調査に頼らざるを得なかった。発達・臨床心理学分野では、愛着を成人愛着面接（Main, & Solomon, 1986, 1990）

というインタビューによって評価するが、人格・社会心理学分野では尺度による測定を行っている。両者の間の溝は深く、一方における知見がもう一方と統合されているとは言いがたい状況であった (Shaver, & Mikulincer, 2004 参照)。そこで第一著者は、人格・社会心理学的立場から愛着の内的ワーキング・モデルの二つの下位次元である自己モデル (見捨てられ不安) と他者モデル (親密性の回避) のどちらもが悪い「恐れ-回避」型を、理論上は無秩序・無方向型の愛着スタイルと同一視して、上述したモデルの再現性を検討してきた。以下にその概要を述べる。

例えば、福井 (2007a) は、質問票調査によって養育態度や愛着と解離傾向の相関について検討した結果、養育態度の2つの下位次元の1つであるケアの得点は解離傾向と弱い負の、同じくもう一つの下位次元である過干渉の得点は弱い正の有意な相関をそれぞれ報告した。それに対して、解離傾向と愛着のアンビバレント型と回避型の得点の間に、また愛着の内的ワーキング・モデルの下位次元である「見捨てられ不安 (自己モデル)」と「親密性の回避 (他者モデル)」との間に、それぞれ弱い有意な正の相関を報告した (福井, 2007a)。

続いて、福井 (2007b) は、養育態度を2つの下位次元の得点の高低の組み合わせから4つの養育型に分類して解離傾向の得点を比較した結果、父親の養育型では affectionless control 型 (低いケア・高い過干渉) の方が optimal bonding 型 (高いケア・低い過干渉) よりも有意に解離傾向が高いのに対して、母親の養育型では affectionless control 型は、optimal bonding 型と neglectful parenting 型 (低いケア・低い過干渉) よりも有意に解離傾向が高いことが見出された。また、愛着の内的ワーキング・モデルの2つの下位次元の得点の高低の組み合わせから、愛着スタイルを4つに分類して解離傾向の得点を比較した結果、安定型は他の全ての不安定型 (とらわれ型、「拒絶-回避」型、「恐れ-回避」型) よりも解離傾向が有意に低いことが分かった (福井, 2007b)。

ところで、解離について、正常な状態から解離性同一性障害に至るスペクトラムを想定する立場から、病的解離群は正常群とは質的に異なるという立場に移行しつつあることを踏まえ、福井 (2007c) は、DES-Taxon (Waller, Putnam, & Carlson, 1996; Waller, & Ross, 1997) を用いて被調査者を正常群と病的解離群に分類し、両群間で養育態度や愛着の得点を比較した。その結果、病的解離群は正常群に比較して、養育態度

の下位次元であるケア得点が有意に低いものに対して、過干渉得点が有意に高く、内的ワーキング・モデルの下位次元である「見捨てられ不安」や「親密性の回避」も有意に高く、愛着型得点についてはアンビバレント型得点と回避型得点有意に高かった。

これらの知見から、「恐れ-回避」型の愛着型を持つ個人において解離傾向が高いこと、その背景に不適切な養育が存在することが推測できたとと言える。しかしながら、これらの研究においては線形分析が用いられており、相関値は有意ではあるものの、その値は非常に低かった。そこで、愛着の内的ワーキング・モデルの2つの下位次元と解離傾向の得点を用いて、被調査者を非線形分析の一つであるクラスタ分析によっていくつかのサブタイプに分類した結果、「恐れ-回避」型と目される愛着型を有するサブタイプが複数抽出されたが、その中でも高い解離傾向を伴う群のみ心理的な健康度が極端に悪いことが分かった (福井, 2008, 2010)。

しかしながら、養育態度の尺度は虐待的な養育環境の影響の一部を反映しているに過ぎないばかりか、解離傾向に対する説明率も低かった。さらに、愛着の内的ワーキング・モデルの尺度では、被虐待経験によって形成されたことが推測される不安定な愛着を測定しているに過ぎず、被虐待的な養育環境自体を直接的に測定できていないという問題があった。以上のことから、被虐待経験が不安定愛着を形成し、後の解離性障害を招来するというモデルについては間接的な証左しか得られなかった。そこで、被虐待経験を直接的に聴取する尺度を導入する必要性に迫られ、Child Abuse and Trauma Scale (以後 CATS: Sanders & Giolas, 1991; Sanders & Becker-Lauren, 1995, 田辺, 1996, 2005) を用いた研究を開始した。また、解離傾向の高まりを基盤として、心身の不健康や不適応に至るモデルを検討する必要に迫られた。というのも、解離性障害は多様な心身の主訴として現れることが多く、その現れも重複していることが普通であるからである。さらに、解離傾向については、身体表現性解離 (Somatoform Dissociation: Nijenhuis, 2004, Nijenhuis, Spinhoven, van Dyck, van der Hart, & Vanderlinden, 1996) まで範疇に入れると、多種多様な不健康状態をこのモデルである程度説明できる可能性があると思われた。そこで、上述した被虐待経験を直接的に聴取する CATS, 身体表現性解離傾向を把握する SDQ (Somatoform Dissociation Questionnaire), さらに心身の不健康や不適応を測定する尺度を加えて、新たな調査研究を実施した。

その成果の一部を以下に示す。

福井・野村（2009）と福井・野村・小澤・田辺（2010）は、被虐待経験が心身の解離傾向と心身症の背景要因とされてきたアレキシサイミア傾向を介して心身の不健康に及ぼす影響について検討し、心身どちらの不健康に対しても被虐待経験と精神的解離傾向、さらにはアレキシサイミア傾向の下位次元である「感情の同定・認識困難」の主効果を見出したのに対して、身体表現性解離傾向やアレキシサイミアの他の下位次元の効果は有意ではないことを報告した。また、野村・福井（2009）は、被虐待経験と心身の解離傾向が精神症状と身体疾患に及ぼす影響について検討し、精神症状のほとんどに対しては精神的解離傾向の有意な効果を見出したのに対して、身体疾患に対しては身体表現性解離傾向の影響が有意となり、精神的解離傾向の効果は小さくなることを報告した。

さらに、福井・野村（2010）は、上述のモデルに愛着の内的ワーキング・モデルの2つの下位次元を加えて同様の分析を行った結果、ほとんどの精神症状に対しては、被虐待経験と愛着の内的ワーキング・モデルの下位次元の一つである「見捨てられ不安」（自己モデル）と精神的解離傾向の有意な効果が保存されたのに対して、身体疾患に対しては、被虐待経験と愛着の内的ワーキング・モデルの「見捨てられ不安」、身体表現性解離傾向、精神的解離傾向の効果の現れ方に一貫性がなく、愛着の内的ワーキング・モデルの「親密性の回避」の主効果が常に有意ではなかったことだけが一貫していた。クラス分析の結果、被虐待経験との関連が強いのは「とらわれ型」の愛着型を持つサブタイプであり、身体疾患を最も報告していたのに対して、「恐れ回避型」の愛着型を持つサブタイプにおいては被虐待経験も身体表現性解離傾向も低く、精神症状の得点のみが高かったことが分かった（福井・野村，2010）。

ここまでで、被虐待経験が不安定愛着を形成し、心身の解離傾向を促進することで、心身の不適応に至るといってモデルを支持する証拠が、一部は矛盾する結果も含みつつも蓄積されてきていたが、それぞれの研究は大学生を対象とした最大200人規模の調査によるものに過ぎず、大規模な標本における再現性を検証する必要性があった。

また、個別の心身症や身体疾患に対する被虐待経験と愛着の内的ワーキング・モデル、心身の解離傾向の効果についてはこの時点では未検討であったため、代表的な心身症であるIBSから、上述のモデルの適合

を検討し始めることにした。IBSを選択した理由は、

1) いち早く、被虐待経験のようなトラウマ体験の影響が診療ガイドラインに明記されたことと、2) 筆者らの検討でも消化器系疾患には被虐待経験や愛着の内的ワーキング・モデル、心身の解離傾向の影響が見られたこと、3) 健康な大学生を対象とするに当たって、有病率の多い疾患を選択したかったことが挙げられる。

さらに、上述のモデルにおいて、被虐待経験や不安定愛着、心身の解離傾向が心身の不健康に及ぼす影響の媒介要因について検討する必要が生じた。

3. 被虐待経験や不安定愛着、心身の解離傾向が心身の健康に及ぼす影響の媒介要因

前述したように、虐待を受けた者が、長期にわたる悪影響に見舞われることはよく知られていた。ただし、それを媒介する要因については検討が不十分であった。また、不安定愛着が心身の不健康や不適応を招来することもよく知られていたが、そのメカニズムは未解明であった。さらに、解離傾向に至っては、心身に多様な愁訴が現れるが、その増悪の媒介要因について決め手があるとは言えなかった。

3つの要素に共通する要因として、情動調整スキルや対人関係スキルのような社会的スキルの未発達とそれによって生じる対人的なストレス事態が候補として考えられた。虐待経験を受けた者が、他者を恐れったり、信頼できなくなったり、回避したりすることは容易に推測できる。また、愛着形成の不全は情動調整の不全や対人関係のあり方と深い関わりがある。さらに解離はこうした適切な社会的スキルを持てなかった者が十分なソーシャル・サポートを得られないために頼らざるを得ない原始的な防衛機制であるとも考えることができる。

そこで、CAASK²では、情動調整に関係する要因を可能な限り多く測定することにした。また、情動調整不全の結果として生じる様々な対人困難やその要因についても多方面から測定を試みた。具体的な尺度名は後述するが、対人関係全般に関わる変数を多様な側面から測定した。

4. 大規模調査の必要性

このように、被虐待経験が不安定愛着を形成し、情動調整不全を招くことによって、対人ストレスや対人関係上の問題が増加し、その結果として心身の不健康・不適応に至るといって理論モデルに対して、大規模な調査（CAASK²）を実施することで、その妥当性を検討

する必要が生じた。

そこで我々は、2012年から2年間にわたって継続的にデータを収集した。独立変数は被虐待経験や愛着、心身の解離傾向に関する変数群、媒介変数は情動調整や情動コンピテンス、共感性など対人関係の悪化に寄与する変数群、従属変数は心身の不健康や不適応に関する変数群である。具体的な尺度名については後述した。なお、ほとんど全ての尺度は日本語版が作成されており、信頼性と妥当性が確立されているが、CAASK² から新たに尺度が作成されたこともあった。

一度に実施する調査における項目数は、調査協力者の負担を考慮して、1回当たり200項目前後までとした。また、変化しやすい状態や特性の測定など、特別な理由がある場合を除いて、同一尺度の重複測定は可能な限り避けた。また、調査は、第一著者のゼミ生による卒論や修論のためのデータ収集も兼ねて実施されたため、CAASK² に関係のない尺度も、ある程度含まれていた。

II. CAASK² の概要

1. 手続き

2012年は10回、2013年には8回に渡って、第一著者の所属先と、非常勤で勤務する大学の心理学系の授業で質問票調査を実施した。なお、潜在的な愛着スタイルを測定するために用いた後述する潜在連合テストについてのみ、授業中に募集を行い、後日、他所で実験を実施した。

2. 倫理的配慮

配布する質問票については、修士論文のための研究である場合には、可能な限り所属先の「ヒトを対象とした研究に関する倫理審査委員会」の承認を受けたが、卒業論文のための研究である場合には、倫理委員会における審査の手続きが未整備であったため、倫理審査委員会で認可された研究と同等の倫理的配慮を厳格に遵守して調査を実施した。また、非常勤先の大学では、事前にその大学の教員に研究計画と質問票の現物を見せて、調査実施の許可を受けるルールがあったため、それに従って許可を受けた。なお、非常勤先でのみ、コースクレジット制度が採用されていたため、これを利用した。質問票調査は、授業時間中に「データ収集の目的と調査への参加の任意性、データの保管方法と公表、プライバシーの保護」などについて、文書で同意を得た上で実施し、質問票と同意書は別々に回収さ

れた。複数の調査のマッチングは、個人に特有ではあるが、個人が特定される恐れのない血液型や生まれた日の2桁の数字、携帯電話の下2桁の数字などの組み合わせによって行った。

なお、被虐待経験を尋ねる尺度など、特に配慮が必要だと思われる尺度が含まれている調査時には、予め隣の席を空けて座るように教示した。

3. 被調査者

2012年については、大学生2058名（男性：1143名、女性：915名）であり、平均年齢は19.30歳（ $SD=1.49$ ）であった。

2013年については、大学生1097名（女性：517名、男性：562名、不明18名）であり、平均年齢は19.55歳（ $SD=1.11$ ）であった。

4. 使用尺度

使用尺度について以下に記した。2012年は Table 1 に、2013年は Table 2 にそれぞれリスト化した。

CAASK² (2012年) における使用尺度

① 独立変数（被虐待経験、不安定愛着、心身の解離、アレキシサイミア）

虐待的養育環境

虐待的養育環境を測定するために、38項目からなるCATS (Child Abuse and Trauma Scale: Sanders & Giolas, 1991; Sanders & Becker-Lauren, 1995) の日本語版 (田辺, 1996, 2005) を用いた。性的虐待、罰、ネグレクト、心理的虐待の4つの下位尺度からなり、「0: まったくなかった」～「4: いつものように」までの5件法で評定を求めた。

愛着スタイル

愛着スタイルを測定するために、RQ (Relationship Questionnaire: Bartholomew & Horowitz, 1991) の日本語版 (加藤, 1998, 1999) を用いた。自己観と他者観の2つの下位尺度と回答者の愛着スタイルを尋ねる尺度からなる。本尺度は、「一般他者 (人)」との関係について4つの愛着スタイルの特徴を記述した文章からなっており、回答者はまず、「人に対する感じ方のタイプ」として導入された4つの文章 (愛着スタイルの記述文) のそれぞれについて、どの程度自分に一致しているかを、「1: まったくあてはまらない」～「7: 非常にあてはまる」までの7件法で評定を求めた。次に、その4つのスタイルから自分に最も当てはまると思うスタイルを1つ選択するよう求めた。

愛着の顕在的内的ワーキング・モデル

愛着の顕在的内的ワーキング・モデルを測定するために、30項目からなる ECR (the Experience in Close Relationships inventory: Brennan & Shaver, 1998) を元に中尾・加藤 (2004) が作成した一般他者版成人愛着スタイル尺度 (ECR-GO: the Experience in Close Relationships inventory Generalized Other version) を用いた。顕在的「見捨てられ不安」と顕在的「親密性の回避」の2つの下位尺度からなり、「1:まったくあてはまらない」～「7:非常にあてはまる」までの7件法で評定を求めた。

愛着の潜在的内的ワーキング・モデル

潜在的な愛着の内的ワーキング・モデルを測定するために、潜在連合テスト (Implicit Association Test: 以後 IAT) (Greenwald, McGhee, & Schwartz, 1998) に基づいて作成された、「見捨てられ不安」IAT と「親密性の回避」IAT (藤井・山田・上淵・利根川, 2011) を用いた。潜在的「見捨てられ不安」と潜在的「親密性の回避」の2つの下位尺度からなる。なお、IAT では通常は PC を用いて語彙分類課題の反応時間を測定することで各変数が計算されるが、CAASK² では紙と筆記用具を用いた紙筆版でも測定された。

精神的解離

精神的解離を測定するために、28項目からなる DES-II (Dissociative Experience Scale-II: Bernstein, & Putnam, 1986; Carson, & Putnam, 1993) の日本語版 (田辺・小川, 1992) を用いた。合計得点を精神的解離の得点として、「0%:そういうことはない」～「100%:いつもそうだ」までの11件法で評定を求めた。

身体表現性解離

身体表現性解離を測定するために、20項目からなる SDQ-20 (Somatoform Dissociation Questionnaire: Nijenhuis, Spinhoven, Van Dyck, Van der Hart, & Vanderlinden, 1996) の日本語版 (福島・胡桃澤・田中・安, 未公刊) を用いた。合計得点を身体表現性解離の得点として、「0:全くあてはまらない」～「4:非常にあてはまる」までの5件法で評定を求めた。

アレキシサイミア

アレキシサイミアを測定するために、16項目からなる GALEX (Gotow Alexithymia Questionnaire: 後藤・小玉・佐々木, 1999) を用いた。体感・感情の認識不全, 感情の表現不全, 表層的思考, 空想の欠如の4つの下位尺度からなり、「1:まったくあてはまらない」～「7:まったくあてはまる」までの7件法で評定を求めた。

② 媒介・調整変数 (情動調整不全, 情動スキル, 社会的スキル, 対人ストレス, 対人困難)

ふれ合い恐怖心性

ふれ合い恐怖心性を測定するために、17項目からなるふれ合い恐怖心性尺度 (岡田, 2002) を用いた。対人退却, 関係調整不全の2つの下位尺度からなり、「1:まったくあてはまらない」～「6:とてもあてはまる」までの6件法で評定を求めた。

対人恐怖心性

対人恐怖心性を測定するために、30項目からなる対人恐怖心性尺度 (堀井・小川, 1996, 1997) を用いた。自分や他人が気になる悩み, 集団に溶け込めない悩み, 社会的場面で当惑する悩み, 目が気になる悩み, 自分を統制できない悩み, 生きることによって疲れている悩みの6つの下位尺度からなり、「0:全然あてはまらない」～「6:非常にあてはまる」までの7件法で評定を求めた。

対人依存欲求

対人依存欲求を測定するために、20項目からなる対人依存尺度 (竹澤・小玉, 2004) を用いた。他者に対する情緒的依存欲求, 道具的依存欲求の2つの下位尺度からなり、「1:全くそう思わない」～「6:いつもそう思う」までの6件法で評定を求めた。

孤独感

孤独感を測定するために、20項目からなる改訂版 UCLA 孤独感尺度 (Russell, Peplau, & Cutrona, 1980) の日本語版 (諸井, 1991) を用いた。合計得点を孤独感の得点として、「1:けっして感じない」～「4:たびたび感じる」までの4件法で評定を求めた。

自己隠蔽

自己隠蔽を測定するために、12項目からなる自己隠蔽尺度 (Larson, & Chastain, 1990) の日本語版 (河野, 2000) を用いた。合計得点を自己隠蔽の得点として、「1:まったくそうでない」～「5:そうである」までの5件法で評定を求めた。

ソーシャル・サポート

ソーシャル・サポートを測定するために、12項目からなる MSPSS (Multidimensional Scale of Perceived Social Support: Zimet, Dahlem, Zimet, & Farley, 1988) の日本語版である SSJ (Social Support scale for Japanese: 田中・竹尾・七田・小山・羽毛田・塚田, 2010) を用いた。家族のサポート, 大切な人のサポート, 友人のサポートの3つの下位尺度からなり、「1:全くそう思わない」～「7:非常にそう思う」までの7件法で評定を求めた。

心理的負債感

心理的負債感を測定するために、18項目からなる心理的負債感尺度（相川・吉森，1995）を用いた。合計得点を心理的負債感の得点として、「1：全くあてはまらない」～「6：非常にあてはまる」までの6件法で評定を求めた。

社会的スキル

社会的スキルを測定するために、18項目からなるKiSS-18（Kikuchi's Scales of Social Skill -18 項目版：菊池，1988）を用いた。合計得点を社会的スキルの得点として、「1：いつもそうでない」～「5：いつもそうだ」までの5件法で評定を求めた。

過剰適応

過剰適応を測定するために、33項目からなる青年期前期用過剰適応尺度（石津，2008）を用いた。自己制御，他者配慮，期待に沿う努力，自己不全感，人からよく思われたい欲求の5つの下位尺度からなり、「1：全くあてはまらない」～「5：非常によくあてはまる」までの5件法で評定を求めた。

共感性

共感性を測定するために、24項目からなる多次元共感性尺度（MES: Multidimensional Empathy Scale: 鈴木・木野，2008）を用いた。被影響性，想像性，視点取得，個人的苦痛，共感的配慮の5つの下位尺度からなり、「1：まったくあてはまらない」～「5：とてもよくあてはまる」までの5件法で評定を求めた。

対人ストレスコーピング

対人ストレスコーピングを測定するために、34項目からなる対人ストレスコーピング尺度（ISI: Interpersonal Stress-coping Inventory: 加藤，2000）を用いた。ポジティブ関係コーピング，ネガティブ関係コーピング，解決先送りコーピングの3つの下位尺度からなり、「1：あてはまらない」～「4：よくあてはまる」までの4件法で評定を求めた。

ノンバーバル・スキル

ノンバーバル・スキルを測定するために、10項目からなるノンバーバル・スキル尺度（和田，1992）を用いた。統制，表出性，感受性の3つの下位尺度からなり、「1：まったくあてはまらない」～「5：とてもよくあてはまる」までの5件法で評定を求めた。

情動コンピテンス

情動コンピテンスを測定するために、28項目からなる情動コンピテンス尺度（久木山，2002）を用いた。ネガティブな情動の影響への対処，状況の読み取り，自分の情動の覚知，他者の情動への関心，共感性，表

出の制御の6つの下位尺度からなり、「1：まったくない」～「5：いつも」までの5件法で評定を求めた。

サイコパシー傾向

サイコパシー傾向を測定するために、21項目からなるPSPS（Primary and Secondary Psychopathy Scales: Levenson, Kiehl, & Fitzpatrick, 1995）の日本語版（杉浦・佐藤，2005）を用いた。一次性サイコパシー傾向，二次性サイコパシー傾向の2つの下位尺度からなり、「1：全くあてはまらない」～「4：非常にあてはまる」までの4件法で評定を求めた。

劣等感

劣等感を測定するために、50項目からなる劣等感尺度（高坂，2008）を用いた。異性との付き合いの苦手さ，学業成績の悪さ，運動能力の低さ，家族水準の低さ，性格の悪さ，友達づくりの下手さ，統率力，身体的魅力のなさの8つの下位尺度からなり、「1：まったく感じない」～「5：とても感じる」までの5件法で評定を求めた。

妬み，シャーデンフロイデ，同情

妬み，シャーデンフロイデ，同情を測定するために、仮想的なシナリオと感情の測定（澤田，2009）を用いた。仮想的なシナリオは，架空のターゲット人物（T.F.さん）に関する2種類（有利条件 vs 平均条件）であった。それぞれの条件でターゲット人物の状況が異なっていた。有利条件では，架空の人物は都内の有名私立大学生で裕福な家庭で育った後，高級マンション暮らし，スポーツが得意で，同じサークルの容姿端麗な人と付き合っている。加えて，成績は非常に優秀で，大手進学塾で時給3000円の塾講師のアルバイトをしており，就職は希望していた一流企業から内定を得たというものであった。平均条件では，地方のあまり名の知られていない私立大学生で，平均的な家庭で育った後，古くて安いアパートで暮らし，スポーツは得意ではないが，同じサークルの容姿は普通と評される人と付き合っている。そして，成績は普通で小さな学習塾で時給800円の事務アルバイトをしており，就職はあまり知られていない中小企業から内定を得たというものであった。上記のどちらかの条件のシナリオを提示された後，架空の人物についてどのように思うかを回答するように求めた。その際，妬みに関する項目5つ（例，T.F.さんに嫉妬を感じる）（澤田，2008）と，妬みはネガティブな感情のため，全ての項目に低い得点を報告するという防衛的な反応が懸念されるために，フィルター項目6つ（私はT.F.さんのようになりたい）（澤田，2008）について「1：全くそう思わない」～「6：

非常にそう思う」までの6件法で評定を求めた。次に澤田(2008)、Sawada & Hayama(2012)にならい、ターゲット人物に関するシナリオに引き続き、その後日談として、自身の不注意から不幸に見舞われるという仮想場面(自身が飲酒運転をし、警察に検挙されたことが原因となり、内定を取り消され、恋人にも振られてしまう)というシナリオを提示した。そして、架空の人物について感じる気持ちについて、13項目の質問(例、うれしい、気の毒だ)(澤田, 2003)について、「1:全くそう思わない」～「6:非常にそう思う」までの6件法で評定を求めた。上記のシナリオへの回答を通して、妬み、シャーデンフロイデ、同情の下位尺度を得た。

共有経験

共有経験を測定するために、共有経験尺度(角田, 1991, 1992)を改訂し、20項目からなる共有経験尺度改訂版(角田, 1994)を用いた。共有経験尺度と共有不全経験尺度の2つの下位尺度からなり、「0:まったくあてはまらない」～「6:とてもあてはまる」までの7件法で評定を求めた。

相談行動の利益・コスト

相談行動の利益・コストを測定するために、相談行動の利益・コスト尺度(永井・新井, 2007)の改訂版であり、26項目からなる相談行動の利益・コスト尺度改訂版(永井・新井, 2008)を用いた。ポジティブな結果、否定的応答、秘密漏洩、自己評価の低下、問題の維持、自助努力による充実感の6つの下位尺度からなり、「1:そう思わない」～「5:そう思う」までの5件法で評定を求めた。

被援助志向性

被援助志向性を測定するために、11項目からなる被援助志向性尺度(田村・石隈, 2001)を用いた。援助の欲求と態度、援助関係に対する抵抗感の低さの2つの下位尺度からなり、「1:全くあてはまらない」～「5:よくあてはまる」までの5件法で評定を求めた。

特性被援助志向性尺度

特性被援助志向性を測定するために、13項目からなる特性被援助志向性尺度(田村・石隈, 2006)を用いた。被援助に対する懸念や抵抗感の低さと被援助に対する肯定的態度の2つの下位尺度からなり、「1:全くあてはまらない」～「5:よくあてはまる」までの5件法で評定を求めた。

共感指数

共感指数を測定するために、60項目からなる共感指数(EQ: Empathizing Quotient; Baron-Cohen, 2003 三

宅訳, 2005)尺度を用いた。合計得点を共感指数の得点として、「1:あてはまる(そうである)」～「4:あてはまらない(そうでない)」までの4件法で評定を求めた。

システム化指数

システム化指数を測定するために、60項目からなるシステム化指数(SQ: Sytemizing Quotient; Baron-Cohen, 2003; 三宅訳, 2005)尺度を用いた。合計得点をシステム化指数の得点として、「1:あてはまる(そうである)」～「4:あてはまらない(そうでない)」までの4件法で評定を求めた。

他者意識

他者意識を測定するために、15項目からなる他者意識尺度(辻, 1993)を用いた。内的他者意識、外的他者意識、空想的他者意識の3つの下位尺度からなり、「1:まったくちがう」～「5:まったくそうだ」までの5件法で評定を求めた。

向社会的行動

向社会的行動を測定するために、向社会的行動尺度(Rushton, Chrisjohn, & Fekkin, 1981)を参考に作成された、20項目からなる向社会的行動尺度(菊池, 1988)を用いた。合計得点を向社会的行動として、「1:したことがない」～「5:いつもした」までの5件法で評定を求めた。

自己愛

自己愛を測定するために、NPI(Narcissitic Personality Inventory: 大石・福田・篠置, 1987)の短縮版であり、30項目からなるNPI-S(Narcissitic Personality Inventory Short version: 小塩, 1998)を用いた。注目・賞賛欲求、優越感・有能感、自己主張性の3つの下位尺度からなり、「1:まったくあてはまらない」～「5:とてもよくあてはまる」までの5件法で評定を求めた。

③ 従属変数(心身の不健康・不適応)

抑うつ

抑うつを測定するために、20項目からなる自己評価式抑うつ性尺度(SDS: Self-rating Depression Scale: Zung, 1965)の日本語版(福田・小林, 1973)を用いた。合計得点を抑うつの得点として、「1:ないか、たまに」～「4:いつも」までの4件法で評定を求めた。

絶望感

絶望感を測定するために、20項目からなるベック絶望感尺度(Beck, Weissman, Lester & Trexler, 1974; Beck, & Steer, 1988)の日本語版(Tanaka, Sakamoto, Ono, Fujihara, & Kitamura, 1998)を用いた。合計得点

を絶望感の得点として、「0：はい」か「1：いいえ」の2件法で評定を求めた。

自尊感情

自尊感情を測定するために、10項目からなるローゼンバーグの自尊感情尺度 (Rosenberg, 1965) の日本語版 (山本・松井・山成, 1982) を用いた。合計得点を自尊感情の得点として、「1：あてはまらない」～「5：あてはまる」までの5件法で評定を求めた。

主観的幸福感

主観的幸福感を測定するために、4項目からなるSHS (Subjective Happiness Scale: Lyubomirsky, & Lepper, 1999) の日本語版 (島井・大竹・宇津木・池見 & Lyubomirsky, 2004) を用いた。合計得点を主観的幸福感の得点として、「1：まったくない」～「7：とてもある」までの7件法で評定を求めた。

人生に対する満足尺度

人生に対する満足度を測定するために、5項目からなるSWLS (the Satisfaction With Life Scale: Diener, Emmons, Larsen, & Griffin, 1985) の日本語版 (角野, 1994) を用いた。合計得点を人生に対する満足感の得点として、「1：全くそうではない」～「7：全くそうだ」までの7件法で評定を求めた。

攻撃性

攻撃性を測定するために、BAQ (Buss-Perry Aggression Questionnaire: Buss, & Perry, 1992) の日本語版 (安藤・曾我・山崎・姉妹・嶋田・宇津木・大芦・坂井, 1999) を用いた。身体的攻撃・短気・敵意・言語的攻撃の4つの下位尺度からなる。本研究では短気と敵意得点の12項目を使用し、「1：全くあてはまらない」～「5：非常によくあてはまる」までの5件法で評定を求めた。

怒り

怒りを測定するために、44項目からなるSTAXI (State-Trait Anger Expression Inventory: Spielberger, 1988) の日本語版 (鈴木・春木, 1994) を用いた。状態怒り・特性怒り・怒り表出の3つの下位尺度からなり、「1：全くあてはまらない」～「4：とてもよくあてはまる」までの4件法で評定を求めた。

怒りへの対処

怒りへの対処を測定するために、23項目からなるMAQ (Müller Anger Coping Questionnaire: Müller, 1993) の日本語版 (大竹・島井・曾我・宇津木・山崎・大芦・坂井・西・松島・嶋田・安藤, 2000) を用いた。怒り表出, 怒り抑制, 罪悪感, 怒り主張の4つの下位尺度からなり、「1：全くあてはまらない」～

「4：いつもあてはまる」までの4件法で評定を求めた。

不安感受性

不安感受性を測定するために、18項目からなるASI-3 (Anxiety Sensitivity Index-3: Taylor, Zvolensky, Cox, Deacon, Heimberg, Ledley, Abramowitz, Holaway, Sendin, Stewart, Coles, Eng, Daly, Arrindell, Bouvaard, & Cardenas, 2007) の日本語版 (福井・西村・不破・宮本, 2011) を用いた。社会的不安, 認知的不安, 身体的不安の3つの下位尺度からなり、「0：あてはまらない」～「4：あてはまる」までの5件法で評定を求めた。

摂食障害傾向

摂食障害傾向を測定するために、EAT (Eating Attitude Test: Garner, & Gifinkel, 1979) の短縮版で、26項目からなるEAT-26 (Garner, Olmstead, Bohr, & Gifinkel, 1982) の日本語版 (Mukai, Crago, & Shisslak, 1994) を用いた。合計得点を摂食障害傾向の得点として、「1：いつも」～「6：まったくない」までの6件法で評定を求めた。

精神的健康

精神的健康を測定するために、30項目からなるGHQ (General Health Questionnaire: Goldberg, 1978) の日本語版 (中川・大坊, 1985) を用いた。一般的疾患, 身体症状, 睡眠障害, 社会的活動障害, 不安, 希死念慮・うつ等の6つの下位尺度からなり、「1：まったくなかった」～「4：たびたびあった」までの4件法で評定を求めた。なお、各尺度得点には、1か2で評定した場合は0に、3か4で評定した場合は1に変換してから合計したものをを使用した。

身体的健康

身体の健康状態を測定するために、男性版160項目、女性版162項目からなるCMI (Cornel Medical Index: Brodman, Erdmann, Lorge & Wolff, 1949) の日本語版 (金久・久松, 1972) を用いた。目と耳, 呼吸器系, 心臓脈管系, 消化器系, 筋肉骨格系, 皮膚, 神経系, 泌尿器系 (男女で回答項目が異なる), 疲労度, 疾病頻度, 既往症, 習慣の12の下位尺度からなり、「1：はい」か「2：いいえ」の2件法で評定を求めた。

IBS症状

過敏性腸症候群 (IBS: irritable bowel syndrome) の症状を測定するために、BIBSSQ (Birmingham IBS Symptom Questionnaire: Roalfe, Roberts, & Wilson, 2008) をもとに作成された11項目からなるBIBSSQ日本語版 (浅野・駒沢・石村, 2012) を用いた。下痢・痛み, 便秘, 生活上の支障の3つの下位尺度から

なり、「0：全くない」～「5：いつも」までの6件法で評定を求めた。

IBS への対処

IBS 傾向の高い人の IBS 症状に対する対処方略を測定するために、29項目からなる IBS 症状に対する対処方略尺度（小林・駒沢・竜崎・浅野，2012）を用いた。無視・否定，否認・回避，原因帰属，直面の4つの下位尺度からなり、「0：全くない」～「5：いつも」までの6件法で評定を求めた。

医学的に説明できない皮膚症状

医学的に説明できない皮膚症状を測定するために、9項目からなる日本語版 Cutaneous 9（小澤・田辺・後藤，2008）を用いた。「0：全然ない」～「9：非常にある」までの10件法で評定を求め、評定が「1」以上の項目では感じた部位（22部位）を問い、最後に医師の診断の有無を問うた。また、身体疾患の診断がある場合にはその項目は無得点とした。

④ 統制変数（ストレッサー，社会的望ましさ，文化的背景，その他）

ストレッサー

ストレッサーを測定するために、60項目からなる対人・達成領域別ライフイベント尺度（高比良，1981）を用いた。対人ネガティブライフイベント，対人ポジティブライフイベント，達成ネガティブライフイベント，達成ポジティブライフイベントの4つの下位尺度からなり、過去3か月間においてそれぞれのライフイベントを「0：経験しなかった」か「1：経験した」の2件法で評定を求めた。

社会的望ましさ

社会的望ましさを測定するために、24項目からなるバランス型社会的望ましさ尺度（BIDR: Balanced Inventory of Desirable Responding: Paulhus, 1991）の日本語版（谷，2008）を用いた。自己欺瞞と印象操作の2つの下位尺度からなり、「1：全くあてはまらない」～「7：非常にあてはまる」までの7件法で評定を求めた。

完全主義

完全主義を測定するために、多次元自己志向的完全主義尺度（桜井・大谷，1997）と完全主義尺度（辻，1992）から作成した20項目からなる自己志向的完全主義尺度（福井・山下，2012）を用いた。完全性と理想の追求と不完全性と失敗への恐れの下位尺度からなり、「1：全くあてはまらない」～「6：非常にあてはまる」までの6件法で評定を求めた。

自己効力感

自己効力感を測定するために、23項目からなる特性的自己効力感尺度（Shere, Mercandate, Printice-Dun, & Jacobs, 1982）の日本語版（成田・下仲・中里・河合・佐藤・長田，1995）を用いた。合計得点を自己効力感の得点として、「1：そう思う」～「5：そう思わない」までの5件法で評定を求めた。

行動の動機づけ

罰からの回避と報酬への接近の動機づけシステムを測定するために、20項目からなる BIS/BAS 尺度（Behavioral Inhibition System and Behavioral Active System scales: Carver, & White, 1994）の日本語版（高橋・山形・木島・繁樹・大野・安藤，2007）を用いた。BIS, BAS 駆動，BAS 刺激探求，BAS 報酬反応性の4つの下位尺度からなり、「1：あてはまらない」～「4：あてはまる」までの4件法で評定を求めた。

風習行動

日本の伝統的な風習を日常生活においてどの程度行っているかを測定するために、101項目からなる風習行動尺度（福井，2013）を用いた。季節行事，少数派風習，迷信，祈願・祈祷，弔い，言い伝え，厄年の7つの下位尺度があり、「1：全くしない（だろう）」～「5：必ずする（だろう）」までの5件法で評定を求めた。また、項目の内容が全く知らない行動であった場合は、「1：全くしない（だろう）」を選択するよう求めた。なお、本研究によって測定されたデータから、本尺度は開発された。

正当世界信念

正答世界信念を測定するために、4項目からなる正当世界信念尺度（今野・堀，1998）を用いた。合計得点を正当世界信念の得点として、「1：全くそう思わない」～「5：非常にそう思う」までの5件法で回答を求めた。

不公正状況への認知

不公正状況の認知を測定するために、今野・堀（1998）の手順に従って、因果応報と不公正な現状の2つの得点を得た。この方法では12の不公正状況を、(1) どの程度よくあることか、(2) どの程度不公平と感じるか、(3) どの程度あきらめを感じるかの観点から「1：全く」～「5：非常に」までの5件法で評定を求めた。

Table 1 CAASK² (2012年) において使用した尺度の一覧

変数	尺度名	作者	下位尺度
独立変数			
虐待的養育環境	CATS 日本語版	田辺(1996, 2005)	性的虐待, 罰, ネグレクト, 心理的虐待
愛着スタイル	RQ 日本語版	加藤(1998,99)	自己観, 他者観
愛着の顕在的内的ワーキング・モデル	一般他者版成人愛着スタイル尺度 (ECR-GO)	中尾・加藤(2004)	顕在的見捨てられ不安, 顕在的親密性の回避
愛着の潜在的内的ワーキング・モデル	愛着の内的ワーキングモデル IAT (実験)	藤井他(2011)	潜在的見捨てられ不安, 潜在的親密性の回避
精神的解離	DES-II 日本語版	田辺・小川(1992)	精神的解離
身体表現性解離	SDQ-20 日本語版	福島他(未公刊)	身体表現性解離
アレキシサイミア	GALEX	後藤他(1999)	体感・感情の認識不全, 感情の表現不全, 表層的思考, 空想の欠如
媒介・調整変数			
ふれ合い恐怖心性	ふれ合い恐怖心性尺度	岡田(2002)	対人退却, 関係調整不全
対人恐怖心性	対人恐怖心性尺度	堀井・小川(1995, 1997)	自分や他人が気になる悩み, 集団に溶け込めない悩み, 社会的場面で当惑する悩み, 目が気になる悩み, 自分を統制できない悩み, 生きることによって疲れている悩み
対人依存欲求	対人依存欲求尺度	竹澤・小玉(2004)	情緒的依存欲求, 道具的依存欲求
孤独感	改訂版 UCLA 孤独感尺度日本語版	諸井(1991)	孤独感
自己隠蔽	自己隠蔽尺度日本語版	河野(2000)	自己隠蔽
ソーシャル・サポート	ソーシャル・サポート尺度(SSJ)	岩佐他(2007)	家族のサポート, 大切な人のサポート, 友人のサポート
心理的負債感	心理的負債感尺度	相川・吉森(1995)	心理的負債感
社会的スキル	KISS-18	菊池(1988)	社会的スキル
過剰適応	青年期前期用過剰適応尺度	石津(2008)	自己制御, 他者配慮, 期待に沿う努力, 自己不全感, 人からよく思われたい欲求
共感性	多次元共感性尺度(MES)	鈴木・木野(2008)	被影響性, 想像性, 視点取得, 個人的苦痛, 共感的配慮
対人ストレスコーピング	対人ストレスコーピング尺度(ISI)	加藤(2000)	ポジティブ関係コーピング, ネガティブ関係コーピング, 解決先送りコーピング
ノンバーバル・スキル	ノンバーバル・スキル尺度	和田(1992)	統制, 表出性, 感受性
情動コンピテンス	情動コンピテンス尺度	久木山(2002)	ネガティブな情動の影響への対処, 状況の読み取り, 自分の情動の認知, 他者の情動への関心, 共感性, 表出の制御
サイコパシー傾向	PSPS 日本語版	杉浦・佐藤(2005)	一次性サイコパシー傾向, 二次性サイコパシー傾向
劣等感	劣等感尺度	高坂(2008)	異性との付き合いの苦しさ, 学業成績の悪さ, 運動能力の低さ, 家族水準の低さ, 性格の悪さ, 友達づくりの下手さ, 統率力, 身体的魅力のなさ
妬み, シャーデンフロイデ, 同情	仮想的なシナリオについて評定	澤田(2009)	妬み, シャーデンフロイデ, 同情
共有経験	共感経験尺度改訂版	角田(1994)	共有経験尺度, 共有不全経験尺度
相談行動の利益・コスト	相談行動の利益・コスト尺度改訂版	永井・新井(2008)	ポジティブな結果, 否定的応答, 秘密漏洩, 自己評価の低下, 問題の維持, 自助努力による充実感
被援助志向性	被援助志向性尺度	田村・石隈(2001)	援助の欲求と態度, 援助関係に対する抵抗感の低さ
特性被援助志向性	特性被援助志向性尺度	田村・石隈(2006)	被援助に対する懸念や抵抗感の低さ, 被援助に対する肯定的態度
共感指数	共感指数(EQ)尺度	Baron-Cohen/三宅訳(2005)	EQ指数
システム化指数	システム化指数(SQ)尺度	Baron-Cohen/三宅訳(2005)	SQ指数
他者意識	他者意識尺度	辻(1993)	内的他者意識, 外的他者意識, 空想的他者意識
向社会的行動	向社会的行動尺度	菊池(1988)	向社会的行動
自己愛	NPI-S	小塩(1998)	注目・賞賛欲求, 優越感・有能感, 自己主張性
従属変数			
抑うつ	自己評価式抑うつ性尺度日本語版(SDS)	福田・小林(1973)	抑うつ
絶望感	ベック絶望感尺度	Tanaka et al.(1998)	絶望感
自尊感情	ローゼンバーグの自尊感情尺度日本語版	山本他(1982)	自尊感情
主観的幸福感	日本語版主観的幸福感尺度(SHS)	島井他(2004)	主観的幸福感
人生に対する満足度	SWLS 日本語版	角野(1994)	人生満足感
攻撃性	BAQ 日本語版	安藤他(1999)	身体的攻撃・短気・敵意・言語的攻撃
怒り	STAXI 日本語版	鈴木・春木(1994)	状態怒り尺度・特性怒り尺度・怒り表出尺度
怒りへの対処	MAQ 日本語版	大竹他(2000)	怒り表出, 怒り抑制, 罪悪感, 怒り主張
不安感受性	ASI-3 日本語版	福井他(2011)	社会的不安, 認知的不安, 身体的不安
摂食障害傾向	EAT-26 日本語版	Mukai et al.(1994)	摂食行動
精神的健康	GHQ30 日本語版	中川・大坊(1985)	一般的疾患, 身体症状, 睡眠障害, 社会的活動障害, 不安, 希死念慮・うつ
身体的傾向	CMI 日本語版	金久・久松(1972)	目と耳, 呼吸器系, 心臓脈管系, 消化器系, 筋肉骨格系, 皮膚, 神経系, 泌尿器系, 疲労度, 疾病頻度, 既往症, 習慣
IBS症状	BIBSSQ-J 日本語版	浅野他(2012)	下痢・痛み, 便秘, 生活上の支障
IBSへの対処	IBS 症状に対する対処方略尺度	小林他(2012)	無視・否定, 否認・回避, 原因帰属, 直面
医学的に説明されない皮膚症状	日本語版 Cutaneous9	小澤他(2008)	皮膚症状(部位別)
統制変数			
ストレッサー	対人・達成領域別ライフイベント尺度	高比良(1981)	対人ネガティブライフイベント, 対人ポジティブライフイベント, 達成ネガティブライフイベント, 達成ポジティブライフイベント
社会的望ましさ	バランス型社会的望ましさ尺度日本語版(BIDR-I)	谷(2008)	自己欺瞞, 印象操作
完全主義	自己志向的完全主義尺度	福井・山下(2012)	完全性と理想の追求, 不完全性と失敗への恐れ
自己効力感	特性的自己効力感尺度	成田他(1995)	自己効力感
行動の動機付け	BIS/BAS 尺度日本語版	高橋他(2007)	BIS, BAS 駆動, BAS 刺激探求, BAS 報酬反応性
風習行動	風習行動尺度	福井(2013)	季節行事, 少数派風習, 迷信, 祈願・祈禱, 弔い, 言い伝え, 厄年
正当世界信念	正当世界信念尺度	今野・堀(1998)	正当世界信念
不正状況への認知	不正状況の認知の尺度	今野・堀(1988)	因果応報, 不正な現状

CAASK² (2013年)における使用尺度

① 独立変数 (被虐待経験, 不安定愛着, 心身の解離, アレキシサイミア)

両親の養育態度

養育者の養育態度を測定するために、25項目からなるPBI (Parental Bonding Instrument: Paker, Tupling & Brown, 1979) の日本語版 (小川, 1991) を用いた。養護と過保護の2因子からなり、父親と母親の養育態度について別々に回答させた。各項目に対して、「1: 該当しない」～「4: 該当する」までの4件法で評定を求めた。

愛着の顕在的内的ワーキング・モデル

愛着の顕在的内的ワーキング・モデルを測定するために、一般他者版成人愛着スタイル尺度 (ECR-GO: 中尾・加藤, 2004) を用いた。本尺度については、2012年にも測定しているため詳細は割愛した。

日常的解離

日常的解離傾向を測定するために、日常的解離尺度 (中村, 2003) を短縮し、6項目からなる日常的解離尺度短縮版 (舩田・中村, 2005) を用いた。合計得点を日常的解離の得点として、「1: あてはまらない」～「5: あてはまる」までの5件法で評定を求めた

日常的分割投影

日常的分割投影傾向を測定するために、日常的分割投影尺度 (中村, 2003) を短縮し、8項目からなる日常的分割投影尺度短縮版 (舩田他, 2005) を用いた。合計得点を日常的分割投影傾向の得点として、「1: あてはまらない」～「5: あてはまる」までの5件法で評定を求めた

精神的解離傾向

精神的解離傾向を測定するために、28項目からなるDES-II の日本語版 (田辺他, 1992) を用いた。本尺度については、2012年にも測定しているため詳細は割愛した。

非現実感

日常生活における非現実感経験を測定するために、77項目からなる非現実感質問紙 (須永, 1996) を用いた。合計得点をそれぞれ特性非現実感、状態非現実感の得点として、「1: まったくない」～「7: いつもそうである」までの7件法で評定を求めた。

身体表現性解離

身体表現性解離を測定するために、SDQ-20 の日本語版 (福島他, 未公開) を用いた。本尺度については、2012年にも測定しているため詳細は割愛した。

包括的解離

解離性の主観的体験を包括的に測定するために、65項目からなる包括的解離尺度 (Fukui & Tanabe, 2014) を用いた。離人と現実感喪失、気配・対人過敏、能動的夢体験、身体感覚異常、解離性幻覚、鏡恐怖、夢うつ体験の7つの下位尺度からなり、「0: 全くない」～「4: いつもそうである」までの5件法で評定を求めた。なお、本研究によって測定されたデータから、本尺度は開発された。

② 媒介・調整変数 (情動調整不全, 情動スキル, 社会的スキル, 対人ストレス, 対人困難)

コミュニケーション・スキル

コミュニケーション・スキルを測定するために、24項目からなるENDCOREs (藤本・大坊, 2007) を用いた。自己統制、表現力、解読力、自己主張、他者受容、関係調整の6つの下位尺度からなり、「1: かなり得意」～「7: かなり苦手」までの7件法で評定を求めた。

首尾一貫感覚

首尾一貫感覚を測定するために、29項目からなるSOC (Sense of Coherence) スケール (Antonovsky, 1987; 山崎・吉井監訳, 2001) の日本語版 (山崎, 1999) を用いた。把握可能感、有意味感、処理可能感の3つの下位尺度からなり、「1: あてはまらない」～「5: あてはまる」までの5件法で評定を求めた。

対人ストレスコーピング

対人ストレスコーピングを測定するために、対人ストレスコーピング尺度 (ISI: 加藤, 2000) を用いた。本尺度については、2012年にも測定しているため詳細は割愛した。

自己関係づけ

自己関係づけを測定するために、12項目からなる自己関係づけ尺度 (金子, 2000) を用いた。合計得点を自己関係づけの得点として、「1: あてはまらない」～「5: あてはまる」までの5件法で評定を求めた。

自己愛脆弱性

自己愛脆弱性を測定するために、自己愛脆弱性尺度 (NVS: Narcissistic Vulnerability Scale; 上地・宮下, 2005) を短縮した、20項目からなる自己愛脆弱性尺度短縮版 (上地・宮下, 2009) を用いた。承認賞賛過敏性、自己顕示抑制、潜在的特権意識、自己緩和不全の4つの下位尺度からなり、「1: まったくない」～「5: よくある」までの5件法で評定を求めた。

対人恐怖心性

対人恐怖心性を測定するために、対人恐怖心性尺度（堀井他，1996，1997）を用いた。本尺度については、2012年にも測定しているため詳細は割愛した。

過剰適応

過剰適応を測定するために、33項目からなる青年期前期末過剰適応尺度（石津，2006）を用いた。本尺度については、2012年にも測定しているため詳細は割愛した。

役割同一視

役割同一視を測定するために、16項目からなる役割同一視尺度（RIS: Role Identification Scale: 井上・有光，2013）を用いた。役割被期待感と自己決定回避の2つの下位尺度からなり、「1:全くあてはまらない」～「6:非常によくあてはまる」までの6件法で評定を求めた。

共感性

共感性を測定するため多次元共感性尺度（MES: 鈴木他，2008）を用いた。本尺度については、2012年にも測定しているため詳細は割愛した。

ソーシャル・サポート

ソーシャル・サポートを測定するために、MSPSS（Zimet, et al., 1988）の日本語版である SSJ（田中他，2010）を用いた。本尺度については、2012年にも測定しているため詳細は割愛した。

③ 従属変数（心身の不健康・不適應）

抑うつ

抑うつを測定するために、20項目からなる CES-D scale（The Center for Epidemiologic Studies Depression scale: Radloff, 1977）の日本語版（島・鹿野・北村・浅井，1985）を用いた。合計得点を抑うつの得点として、「0:まれに～なし」～「3:ほとんど～いつも」までの4件法で評定を求めた。

なお、抑うつの測定には、自己評価式抑うつ性尺度（SDS: 福田他，1973）も用いたが、本尺度については、2012年にも測定しているため詳細は割愛した。

無気力感

無気力感を測定するために、19項目からなる無気力感尺度（下坂，2001）を用いた。自己不明瞭，他者不信，疲労感の3つの下位尺度からなり、「1:全くあてはまらない」～「6:かなりあてはまる」までの6件法で評定を求めた。

ボーダーライン傾向

ボーダーライン傾向を測定するために、50項目から

なるボーダーライン・スケール（Conte, Plutchik, Karasu, & Jerrett, 1980）の日本語版（町沢・佐藤，1990）を用いた。合計得点をボーダーラインの得点として、「1:はい」か「2:いいえ」の2件法で評定を求めた。

幸福感

幸福感を測定するために、SHS 日本語版（島井他，2004）を使用した。本尺度については、2012年にも測定しているため詳細は割愛した。

人生満足感

人生満足感を測定するために、SWLS 日本語版（角野，1994）を用いた。本尺度については、2012年にも測定しているため詳細は割愛した。

ストレス反応

ストレス反応を測定するために、大学生用ストレス自己評価尺度（尾関，1990）の短縮版であり、35項目からなる大学生用ストレス自己評価尺度（尾関，1993）を使用した。情動的反応としての「抑うつ」、「不安」、「怒り」、認知・行動的反応としての「情緒的混乱」、「ひきこもり」、身体的反応としての「身体的疲労感」、「自律神経系の活動性亢進」の7つの下位尺度からなり、「0:あてはまらない」～「3:非常にあてはまる」までの4件法で評定を求めた。

不安

不安を測定するために、STAI（State-Trait Anxiety Inventory: Spielberger, Gorsuch, & Lushene, 1970）の日本語版（清水・今栄，1981）を用いた。状態不安と特性不安の2つの尺度からなるが、本研究では状態不安の20項目のみを測定した。合計得点を状態不安の得点として、「1:全くあてはまらない」～「4:非常によくあてはまる」までの4件法で評定を求めた。

不安感受性

不安感受性を測定するために、ASI-3（Taylor, et al., 2007）の日本語版（福井他，2011）を使用した。本尺度については、2012年にも測定しているため詳細は割愛した。

心配

心配の程度を測定するために、16項目からなる PSWQ（Penn State Worry Questionnaire: Meyer, Miller, Metzger, & Borkovec, 1990）の日本語版（本岡・松見・林，2009）を用いた。合計得点を心配傾向の得点として、「1:全くあてはまらない」～「5:非常にあてはまる」までの5件法で評定を求めた。

QOL

QOL の程度を測定するために、26項目からなる

WHOQOL26 (World Health Organization Quality of Life: 田崎・中根, 2007) を用いた。身体的、心理的、社会的、環境、全体の5つの下位尺度からなり、その内容に合わせて、「1:全く悪い」～「5:非常に良い」もしくは「1:全く不満」～「5:非常に満足」、「1:まったくくない」～「5:非常に」の3種類の5件法のいずれか一つで評定を求めた。

④ 統制変数 (ストレッサー, 社会的望ましさ, 文化的背景, その他)

日常生活ストレッサー

ストレッサーを測定するために、32項目からなる大学生用日常生活ストレッサー尺度 (嶋, 1992) を用いた。実存的ストレッサー, 対人ストレッサー, 大学・学業ストレッサー, 物理・身体的ストレッサーの4つの下位尺度からなり、「1:ほとんど気にならなかった」～「4:とても気になった」までの4件法で評定を求めた。

ストレスに対する対処方略

ストレスに対する対処方略を測定するために、24項目からなる TAC24 (Tri-Axial Coping scale 24: 神村・海老・佐藤・戸ヶ崎・坂野, 1995) を用いた。情報収集 (接近-問題焦点-行動), 放棄・諦め (回避-問題焦点-認知), 肯定的解釈 (接近-情動焦点-認知), 計画立案 (接近-問題焦点-認知), 回避的思考 (回避-情動焦点-認知), 気晴らし (回避-情動焦点-行動), カタルシス (接近-情動焦点-行動), 責任転嫁 (回避-問題焦点-行動) の8つの下位尺度からなり、「1:そのようにしたこと (考えたこと) はこれまでにない。今後も決してないだろう」～「5:いつもそうしてきた (考えてきた)。今後も常にそうするだろう」までの5件法で評定を求めた。

没入傾向

没入傾向を測定するために、19項目からなる没入尺度 (坂本, 1997) を用いた。自己没入と外的没入の2つの下位尺度からなり、「1:全くあてはまらない」～「5:かなりあてはまる」までの5件法で評定を求めた。

自己愛

NPI (大石他, 1988) の短縮版 (小塩, 1998: NPI-S) の全30項目を用いた。本尺度については、2012年にも測定しているため詳細は割愛した。

精神的回復力 (レジリエンス)

精神的回復力を測定するために、21項目からなる精神的回復力尺度 (小塩・中谷・金子・長峰, 2002) を用いた。新奇性追求, 感情調整, 肯定的な未来志向の

3つの下位尺度からなり、「1:いいえ」～「5:はい」までの5件法で評定を求めた。

また、同じくレジリエンスを測定するために、21項目からなる二次元レジリエンス尺度 (平野, 2010, 2011) を用いた。資質的レジリエンス要因と獲得的レジリエンス要因の2つの下位尺度からなり、「1:まったくあてはまらない」～「5:よくあてはまる」までの5件法で評定を求めた。

空想

空想傾向および内容を測定するために、多面的空想特徴質問紙 (松井・小玉, 2001) の短縮版である多面的空想特徴質問紙短縮版 (松井・小玉, 2004) を用いた。本尺度は空想の多面的な特徴を測定するために、空想内容 (29項目), 空想に対する認識 (9項目), 空想の役割・影響 (9項目), 空想する状況 (8項目), 空想傾向 (7項目) の5つの尺度で構成される。空想内容は、願望充足的空想, 不幸・不運遭遇的空想, 人生俯瞰的空想, 異相空間的空想, 恋愛・結婚空想の5つの下位尺度からなり、「1:まったくしない」～「4:よくする」までの4件法で評定を求めた。空想に対する認識は、空想活動無益, 空想中願望充足, 空想統制不能の3つの下位尺度からなり、「1:全くそうではない」～「5:とてもそうである」までの5件法で評定を求めた。空想の役割・影響は、未来対処, ポジティブ影響, ネガティブ影響の3つの下位尺度からなり、「1:全くそうではない」～「5:とてもそうである」までの5件法で評定を求めた。空想する状況は、不快状況時空想, 快状況時空想, 行為遂行時空想の3つの下位尺度からなり、「1:全くそうではない」～「5:とてもそうである」までの5件法で評定を求めた。空想傾向は1つの下位尺度からなり、「1:全くそうではない」～「5:とてもそうである」までの5件法で評定を求めた。

自己効力感

特性的自己効力感を測定するために、特性的自己効力感尺度 (Sherer, et al., 1982) の日本語版 (成田他, 1995) を使用した。本尺度については、2012年にも測定しているため詳細は割愛した。

認知的熟慮性-衝動性

認知的熟慮性-衝動性を測定するために、37項目からなる認知的熟慮性-衝動性尺度 (滝間・坂元, 1991) を用いた。熟慮性-衝動性, そそっかしさ, 一般的活動性の3つの下位尺度からなり、「1:あてはまらない」～「4:あてはまる」までの4件法で評定を求めた。

Table 2 CAASK² (2013) において使用した尺度の一覧

変数	尺度名	作者	下位尺度
独立変数			
両親の養育態度	PBI	小川(1991)	養護, 過保護
愛着の顕在的内的ワーキング・モデル	一般他者版成人愛着スタイル尺度(ECR-GO)	中尾・加藤(2004)	顕在的見捨てられ不安, 顕在的親密性の回避
日常的解離	日常的解離尺度短縮版	舩田・中村(2005)	日常的解離
日常的分割投影	日常的分割投影尺度短縮版	舩田・中村(2005)	日常的分割投影
精神的解離	DES-II 日本語版	田辺・小川(1992)	解離
非現実感	非現実感質問紙	須永(1996)	非現実感傾向
身体表現性解離	SDQ-20 日本語版	福島他(未公刊)	身体表現性解離
包括的解離	包括的解離尺度	Fukui & Tanabe(2014)	離人と現実感喪失, 気配・対人過敏, 能動的夢体験, 身体感覚異常, 解離性幻覚, 鏡恐怖, 夢うつ体験
媒介・調整変数			
コミュニケーション・スキル	ENDCOREs	藤本・大坊(2007)	自己統制, 表現力, 解読力, 自己下張, 他者受容, 関係調整
首尾一貫感覚	SOC スケール日本語版	山崎・吉井(2001)	把握可能感, 有意味感, 処理可能感
対人ストレスコーピング	対人ストレスコーピング尺度(ISI)	加藤(2000)	ポジティブ関係コーピング, ネガティブ関係コーピング, 解決先送りコーピング
自己関係づけ	自己関係づけ尺度	金子(2000)	自己関係づけ
自己愛脆弱性	自己愛脆弱性尺度短縮版(NVS)	上地・宮下(2009)	承認賞賛過感性, 自己顕示抑制, 潜在の特権意識, 自己緩和不全
対人恐怖心性	対人恐怖心性尺度	堀井・小川(1995, 1997)	自分や他人が気になる悩み, 集団に溶け込めない悩み, 社会的場面で当惑する悩み, 目が気になる悩み, 自分を統制できない悩み, 生きることに疲れている悩み
役割同一視	役割同一視尺度(RIS)	井上・有光(2013)	役割被期待感, 自己決定回避
ソーシャル・サポート	日本語版ソーシャル・サポート尺度(SS)	岩佐他(2007)	家族のサポート, 大切な人のサポート, 友人のサポート
共感性	多次元共感性尺度(MES)	鈴木・木野(2008)	被影響性, 想像性, 視点取得, 個人的苦痛, 共感的配慮
従属変数			
抑うつ	自己評価抑うつ性尺度日本語版(SDS)	福田・小林(1973)	抑うつ
抑うつ	CES-D scale 日本語版	島他(1985)	抑うつ
無気力感	無気力感尺度	下坂(2001)	自己不明瞭, 他者不信, 疲労感
ボーダーライン	ボーダーライン・スケール	町沢・佐藤(1990)	ボーダーライン
主観的幸福感	日本語版主観的幸福感尺度(SHS)	島井他(2004)	主観的幸福感
人生に対する満足度	SWLS 日本語版	角野(1994)	人生満足感
ストレス反応	大学生用ストレス自己評価尺度	尾関(1993)	抑うつ, 不安, 怒り, 情緒的混乱, ひきこもり, 身体的疲労感, 自律神経系の活動性亢進
不安	STAI 日本語版	清水・今栄(1981)	状態不安
不安感受性	ASI-3 日本語版	福井他(2011)	社会的不安, 認知的不安, 身体的不安
心配	PSWQ 日本語版	本岡他(2009)	心配
QOL	WHOQOL26 日本語版	田崎・中根(2007)	身体, 心理, 社会, 環境, 全体
統制変数			
日常生活ストレスラー	大学生用日常生活ストレスラー尺度	嶋(1992)	実存的ストレスラー, 対人ストレスラー, 大学・学業ストレスラー, 物理・身体的ストレスラー
ストレスに対する対処方略	TAC24	神村他(1995)	情報収集(接近-問題焦点-行動), 放棄・諦め(回避-問題焦点-認知), 肯定的解釈(接近-情動焦点-認知), 計画立案(接近-問題焦点-認知), 回避的思考(回避-情動焦点-認知), 気晴らし(回避-情動焦点-行動), カタルシス(接近-情動焦点-行動), 責任転嫁(回避-問題焦点-行動)
没入傾向	没入尺度	坂本(1997)	自己没入, 外的没入
自己愛	NPI-S	小塩(1998)	注目・賞賛欲求, 優越感・有能感, 自己主張性
精神的回復力	精神的回復力尺度	小塩他(2002)	新奇性追求, 感情調整, 肯定的な未来志向
レジリエンス	二次元レジリエンス尺度	平野(2010, 2011)	資質的レジリエンス要因, 獲得的レジリエンス要因
空想内容	多面的空想特徴質問紙短縮版	松井・小玉(2004)	願望充足の空想, 不幸・不運遭遇の空想, 人生俯瞰の空想, 異相空間の空想, 恋愛・結婚空想
空想に対する認識	多面的空想特徴質問紙短縮版	松井・小玉(2004)	空想活動無益, 空想中願望充足, 空想統制不能
空想の役割・影響	多面的空想特徴質問紙短縮版	松井・小玉(2004)	未来対処, ポジティブ影響, ネガティブ影響
空想する状況	多面的空想特徴質問紙短縮版	松井・小玉(2004)	不快状況時空想, 快状況時空想, 行為遂行時空想
空想傾向	多面的空想特徴質問紙短縮版	松井・小玉(2004)	空想傾向
自己効力感	特性的自己効力感尺度日本語版	成田他(1995)	自己効力感
認知的熟慮性-衝動性	認知的熟慮性-衝動性尺度	滝間・坂元(1991)	熟慮性-衝動性, そそっかしさ, 一般的活動性
楽観-悲観性	楽観・悲観性尺度	外山(2013)	楽観性, 悲観性
性格特性	エゴグラム日本語版	池見・新里(1981)	CP, NP, A, FC, AC
生き方志向	生き方志向尺度	板津(1992)	生き方志向
スピリチュアリティ	SRS	比嘉(2002)	自覚, 意味感, 意欲, 深心, 価値観
心の硬さ	心の硬さ尺度	山下・長縄(2012)	非順応性, 柔軟性・応用力の欠如, 規律・規範の偏重, 過度のこだわり, 融通性の欠如
自我同一性	多次元自我同一性尺度(MEIS)	谷(2001)	自己斉一性・連続性, 対自的同一性, 对他的同一性, 心理社会的同一性
情報処理スタイル	情報スタイル尺度(REI)日本語版	内藤他(2004)	合理的処理, 直感的処理

楽観・悲観性

楽観・悲観性を測定するために、20項目からなる楽観・悲観性尺度（外山，2013）を用いた。楽観性と悲観性の2つの下位尺度からなり、「1：全くあてはまらない」～「4：よくあてはまる」までの4件法で評定を求めた。

性格特性

性格特性を測定するために、50項目からなるエゴグラム（John, 1980）の日本語版（池見・新里，1981）を用いた。批判的親の自我状態（CP: Critical Parent）、養育的親の自我状態（NP: Nurturing Parent）、大人の自我状態（A: Adult）、自由な子どもの自我状態（FC: Free child）、順応的子どもの自我状態（AC: Adapted Child）の5つの下位尺度からなり、「1：いいえ」～「3：はい」までの3件法で評定を求めた。

生き方志向

個人の自己や社会に対する価値観を測定するために、28項目からなる生き方志向尺度（板津，1992）を用いた。合計得点を生き方志向の得点として、「1：全くあてはまらない」～「5：いつもあてはまる」までの5件法で評定を求めた。

スピリチュアリティ

スピリチュアリティを測定するために、15項目からなるSRS（Spirituality Rating Scale: 比嘉，2002）を用いた。自覚、意味感、意欲、深心、価値観の5つの下位尺度からなり、「1：全く思わない」～「5：非常にそう思う」までの5件法で評定を求めた。

心の硬さ

心の硬さを測定するために、30項目からなる心の硬さ尺度（山下・長縄，2012）を用いた。非順応性、柔軟性・応用力の欠如、規律・規範の偏重、過度のこだわり、融通性の欠如の5つの下位尺度からなり、「1：まったくあてはまらない」～「5：非常にあてはまる」までの5件法で評定を求めた。

自我同一性

自我同一性を測定するために、20項目からなる多次元自我同一性尺度（MEIS: Multidimensional Ego Identity Scale: 谷，2001）を用いた。自己同一性・連続性、対自的同一性、対他的同一性、心理社会的同一性の4つの下位尺度からなり、「1：全くあてはまらない」～「7：非常にあてはまる」までの7件法で評定を求めた。

情報処理スタイル

合理的処理と直感的処理における個人差を測定するために、40項目からなるREI（Rational-Experiential Inventory: Pacini, & Epstein, 1999）の日本語版（内藤・

鈴木・坂元，2004）を用いた。合理性と直感性の2つの下位尺度からなり、「1：全くあてはまらない」～「5：非常にあてはまる」までの5件法で評定を求めた。

フェイス・シート

その他に、フェイス・シートへの回答を求めた（2012，2013年とも）。フェイス・シートは性別、年齢、所属学部からなっていた。調査によって、出身地を尋ねたものもあった。

また、本調査は卒業研究や修士論文作成のためのデータ収集の機会としても利用されたため、CAASK²とは関係のない尺度も含まれていたが、記載は割愛した。

Ⅲ. 今後の展望

CAASK²から得られた大規模データセットの一部の変数を用いて、Table 3に示したように、多くの学会発表が生まれたが、論文化されたものはまだ少ない。現在、これらの成果が整理されつつあるため、これから多くの研究論文が執筆されるだろう。今後も、前述したコンセプトに基づいて統合的なモデルを確立するために、ますます多くの研究が公表されることが期待される。

謝辞

CAASK²の調査においては、多くの卒業生、修了生のご協力を得た。全員の名前を記すことはできないが、こころよりお礼申し上げたい。また、複数回の調査に忍耐強く真摯にご協力いただいた全ての学生達にも感謝の意を表したい。

附記

CAASK²の中で、包括的解離傾向を測定する尺度の作成に関わる部分については、科学研究費補助金（基盤(C)課題番号22530769）の助成を受けた。

Table 3 CAASK² データを用いた学会発表および論文の一覧

	タイトル	学会名	発表者
1	虐待的養育環境と成人愛着スタイルが感情調整と共感性に及ぼす影響 その1—ノンバーバル・スキルを従属変数として—	関西心理学会第127回大会	大浦他 (2012)
2	虐待的養育環境と成人愛着スタイルが感情調整と共感性に及ぼす影響 その2—共感性を従属変数として—	関西心理学会第127回大会	岡田他 (2012)
3	虐待的養育環境が愛着の内的ワーキングモデルを介して共感性に及ぼす影響の再検討—邦訳版 Child Abuse and Trauma Scale の再構成された下位尺度を用いて—	第12回日本トラウマティックストレス学会	大浦他 (2013b)
4	虐待的養育環境と完全主義、自己愛が抑うつに及ぼす影響—青年期アナログ群における検討—	日本教育心理学会第55回総会	福井他 (2013c)
5	虐待的養育環境と愛着スタイルが感情調節と共感性に及ぼす影響の再検討 (1)—感情調節を従属変数として—	日本教育心理学会第55回総会	大浦他 (2013c)
6	虐待的養育環境と愛着スタイルが感情調節と共感性に及ぼす影響の再検討 (2)—共感性を従属変数として—	日本教育心理学会第55回総会	岡田他 (2013)
7	虐待的養育環境が愛着の内的ワーキングモデルを介してノンバーバル・スキルに及ぼす影響の再検討—邦訳版 Child Abuse and Trauma Scale の再構成された下位尺度を用いて—	日本心理臨床学会第32回大会	大浦他 (2013d)
8	過剰適応が怒りの表出・抑制を介して IBS 傾向に及ぼす影響—青年期アナログ研究—	日本健康心理学会第26回大会	福井 (2013a)
9	青年期において愛着の顕在・潜在的内的作業モデルが抑うつに及ぼす影響—潜在連合テストを用いた検討—	日本パーソナリティ心理学会第22回大会	大浦他 (2013a)
10	日本人の伝統的な風習が精神的健康や幸福感に及ぼす影響 (1)—風習の頻度を測定する尺度の作成及びその信頼性と妥当性の検討	関西心理学会第125回大会	福井 (2013b)
11	虐待的養育環境が内的作業モデル、孤独感を介してノンバーバル・スキルに及ぼす影響—青年期アナログ群における調査研究—	関西心理学会第125回大会	大浦他 (2013e)
12	虐待的養育環境が内的作業モデルやノンバーバル・スキルと共感性を介して心身の不健康に及ぼす影響の検討	日本情動学会第3回大会	大浦他 (2013f)
13	包括的な解離傾向尺度の短縮版の作成—青年期アナログ研究—	第13回日本トラウマティックストレス学会	福井他 (2014d)
14	虐待的養育環境が自己愛を介して共感性に及ぼす影響—青年期アナログ研究—	第13回日本トラウマティックストレス学会	大浦他 (2014a)
15	日本語版「医学的に説明のつかない皮膚症状」尺度の作成—精神・身体表現性解離との関連—	第55回日本心身医学会総会ならびに学術講演会	福井他 (2014f)
16	包括的な解離傾向尺度の短縮版の作成—青年期アナログ研究—	日本心理臨床学会第33回大会	福井他 (2014e)
17	青年期において虐待的養育環境と自己愛が共感性に及ぼす影響—クラスタ分析による検討—	日本心理臨床学会第33回大会	大浦他 (2014b)
18	顕在・潜在的内的作業モデルの一致・不一致と感情調節との関連—潜在連合テスト (Implicit Association Test) を用いた検討—	日本心理学会第78回大会発表	大浦他 (2014c)
19	顕在・潜在的内的作業モデルがライフイベントの経験頻度に及ぼす影響—潜在連合テスト (Implicit Association Test) を用いた検討—	日本パーソナリティ心理学会第23回大会	大浦他 (2014d)
20	青年期における過剰適応と怒りの表出・抑制、IBS 傾向の関連の再検討—性別による効果の違いの検証	日本健康心理学会第27回大会	福井 (2014b)
21	虐待的養育環境と完全主義、自己愛と抑うつとの関連—クラスタ分析によるサブ・タイプの抽出—	日本教育心理学会第56回総会	福井 (2014c)
22	顕在・潜在的内的作業モデルが対人ストレスコーピングに及ぼす影響—潜在連合テスト (Implicit Association Test) を用いた検討—	日本教育心理学会第56回総会	大浦他 (2014e)
23	日本人の伝統的な風習が精神的健康や幸福感に及ぼす影響 (2)—性差の検討—	関西心理学会第126回大会	福井 (2014a)
24	顕在・潜在的内的作業モデルの一致・不一致が情動コンピテンスに及ぼす影響—潜在連合テスト (Implicit Association Test) を用いた研究—	関西心理学会第126回大会	大浦他 (2014f)
25	回顧された虐待的養育環境と愛着の内的作業モデル、感情調節との関連	甲南大学臨床心理学研究	大浦他 (2014g)
26	どのような解離性の体験が病的解離を予測するか?—包括的解離尺度を用いて—	日本 EMDR 学会第10回学術大会	福井 (2015a)
27	愛着の顕在・潜在的内的作業モデルが共感性に及ぼす影響—潜在連合テスト (IAT) を用いた検討—	日本感情心理学会第23回大会	大浦他 (2015a)
28	包括的な解離体験と空想の関連 その1—空想傾向と空想内容の検討—	第14回日本トラウマティックストレス学会	福井他 (2015d)
29	青年期アナログ群における虐待的養育環境と愛着の内的作業モデル、自己愛との関連—構造方程式モデルを用いた検討—	第14回日本トラウマティックストレス学会	大浦他 (2015b)
30	成人愛着の顕在・潜在的側面は一致しているか? その1—顕在・潜在愛着スタイルの検討—	日本パーソナリティ心理学会第24回大会	福井他 (2015c)
31	成人愛着の顕在・潜在的側面は一致しているか? その2—顕在潜在関係不安と顕在潜在回避の検討—	日本パーソナリティ心理学会第24回大会	大浦他 (2015c)
32	包括的な解離性体験と空想の関連 その2—空想に対する認識、空想の役割・影響、空想する状況の検討—	日本心理臨床学会第34回大会	福井他 (2015e)
33	虐待的養育環境と愛着スタイルが自己愛と精神的健康に及ぼす影響—青年期アナログ群における調査研究—	日本心理臨床学会第34回大会	大浦他 (2015d)
34	顕在・潜在的内的作業モデルが自己愛に及ぼす影響	日本心理学会第79回大会	大浦他 (2015e)
35	愛着の顕在・潜在的内的作業モデルの不一致の大きさと方向が抑うつに及ぼす影響	日本社会心理学会第56回大会	大浦他 (2015f)
36	風習は不安になりやすい人の不適応を緩和できるか?—日本人の伝統的な風習が精神的健康や幸福感に及ぼす影響 (3)	関西心理学会第127回大会	福井 (2015b)
37	愛着の顕在・潜在的内的作業モデルの不一致の大きさと方向が社会適応に及ぼす影響 その1—情動コンピテンスを用いた検討—	関西心理学会第127回大会	大浦他 (2015g)
38	被虐待経験とサイコパス傾向が身体症状に及ぼす影響—サイコパスの媒介効果—	第58回日本心身医学会近畿地方会	松尾他 (2016a)
39	愛着の顕在・潜在的内的作業モデルが不安感受性に及ぼす影響—潜在連合テストを用いた検討—	日本心理学会若手の会; 異分野間協働懇話会	大浦他 (2016b)
40	被虐待経験と愛着の内的作業モデルが過敏性腸症候群 (IBS) 傾向に及ぼす影響	第57回日本心身医学会総会ならびに学術講演会	福井他 (2016c)
41	被虐待経験とアレキシサイミア傾向が身体症状に及ぼす影響—アレキシサイミア傾向の媒介・調整効果—	第57回日本心身医学会総会ならびに学術講演会	松尾他 (2016b)
42	被虐待経験と愛着の内的作業モデルが身体症状に及ぼす影響—潜在連合テストを用いた検討—	第57回日本心身医学会総会ならびに学術講演会	大浦他 (2016c)
43	青年期において被虐待経験と愛着の顕在・潜在的内的作業モデルが共感性と社会的スキルに及ぼす影響—潜在連合テストを用いた検討—	日本心理臨床学会第34回大会発表	大浦他 (2016d)

44	被虐待経験は男女で共感性に異なる影響を及ぼすのか？(1)―愛着の内的作業モデルの調整効果―	日本パーソナリティ心理学会第25回大会	大浦他 (2016e)
45	被虐待経験と愛着の内的作業モデルが抑うつと対人ライフ・イベントに及ぼす影響	日本パーソナリティ心理学会第25回大会	松尾他 (2016c)
46	被虐待経験は男女で共感性に異なる影響を及ぼすのか？(2)―愛着の内的作業モデルの媒介効果―	日本社会心理学会第57回大会	大浦他 (2016f)
47	健康生成モデルにおいて首尾一貫感覚とレジリエンスがストレス反応に及ぼす影響その1	第5回日本ポジティブサイコロジー医学学会学術集会	今井田他 (2016a)
48	風習は依存しやすい人の不適応を緩和できるか？―日本人の伝統的な風習が精神的健康や幸福感に及ぼす影響(4)―	関西心理学会第128回大会	福井 (2016a)
49	被虐待経験と愛着、ストレスラーがIBS傾向に及ぼす影響―青年期アナログ研究―	日本健康心理学会第29回大会	福井 (2016b)
50	健康生成モデルにおいて首尾一貫感覚とレジリエンスがストレス反応に及ぼす影響その2―クラスター分析を用いて―	日本健康心理学会第29回大会	今井田他 (2016b)
51	対人ストレスラーと愛着の内的作業モデルが心身の健康に及ぼす影響その1―媒介効果の性差の検討―	日本健康心理学会第29回大会	大浦他 (2016g)
52	被虐待経験と愛着の内的作業モデルが精神的な健康に及ぼす影響	日本健康心理学会第29回大会	松尾他 (2016d)
53	対人ストレスラーと愛着の内的作業モデルが心身の健康に及ぼす影響その2―調整効果の性差の検討―	第22回心療内科学会総会・学術大会	大浦他 (2016a)
54	青年期において愛着の顕在・潜在的内的作業モデルが希死念慮・うつに及ぼす影響―孤独感の媒介・調整効果の検討―	日本情動学会第6回大会	大浦他 (2016h)
55	Development of a scale for measuring the subjective aspects of dissociative experiences	European Society for Trauma and Dissociation 2014 Conference	Fukui et al. (2016g)
56	Effects of the experiences of abuse and insecure attachment on dissociative tendencies in healthy adolescents	European Society for Trauma and Dissociation 2016 Conference	Fukui et al. (2016h)
57	Effects of abuse experiences and internal working models of attachment on somatic symptoms	31st International Congress of Psychology	Fukui et al. (2016d)
58	Effects of explicit/implicit internal working models of attachment on somatic symptoms-Using Implicit Association Test-	The 6th Asian Congress of Health Psychology	Oura et al. (2016k)
59	Is there a relationship between childhood abuse and insecure attachment with Irritable Bowel Syndrome? -Gender differences in healthy Japanese adolescents-	The 6th Asian Congress of Health Psychology	Fukui et al. (2016f)
60	Effects of anxiety sensitivity and dissociation on somatic symptoms-Gender difference	31st International Congress of Psychology	Fukui et al. (2016e)
61	Effects of Internal Working Models of Attachment on Social Adaptation-1--From the perspective of congruity/incongruity of explicit and implicit aspects of IWM-	31st International Congress of Psychology	Oura et al. (2016i)
62	Effects of Internal Working Models of Attachment on Social Adaptation-2--From the perspective of size and direction of discrepancy between explicit and implicit aspects of IWM-	31st International Congress of Psychology	Oura et al. (2016j)

引用文献

- 相川 充・吉森 護 (1995) 心理的責任感尺度の作成の試み. *社会心理学研究*, **11**, 63-72.
- American Psychiatric Association (2013) *Diagnostic and statistical manual of mental disorders (DSM-5®)*. American Psychiatric Pub.
- 安藤明人・曾我祥子・山崎勝之・島井哲志・嶋田洋徳・宇津木成介・大芦 治・坂井明子 (1999) 日本版 Buss-Perry 攻撃性質問紙 (BAQ) の作成と妥当性：信頼性の検討. *心理学研究*, **70**, 384-392.
- Antonovsky, A. (1987) *Unraveling the Mystery of Health: How People Manage Stress and Stay Well*. San Francisco: Jossey-Bass. (アントノフスキー, A. 山崎喜比古・吉井清子 (監訳) (2001) *健康の謎を解く―ストレス対処と健康保持のメカニズム*. 有信堂高文社.)
- 新里里春・玉井 一・藤井真一・吹野 治・中川哲也・町元あつこ・徳永鉄哉 (1986) 邦訳版食行動調査票の開発およびその妥当性・信頼性の研究. *心身医学*, **26**, 398-407.
- 浅野憲一・駒沢あさみ・石村郁夫 (2012) Birmingham IBS Symptom Questionnaire 日本語版の作成. *日本ヒューマン・ケア学会第14回大会発表論文集*, **63**.
- Baron-Cohen, S. (2003) *The essential difference: Man, Woman*. Greenhouse Publications Pty. Ltd. (サイモン・パロン＝コーエン, 三宅真砂子 (訳) (2005) *共感する女脳, システム化する男脳*. NHK 出版.)
- Bartholomew, K. & Horowitz, L. M. (1991) Attachment styles among young adults: A test of a four category model. *Journal of Personality and Social Psychology*, **61**, 226-244.
- Beck, A. T., Weissman, A., Lester, D., & Trexler, L. (1974) The measurement of pessimism: The Hopeless Scale. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, **42**, 861-865.
- Beck, A. T., & Steer, R. A. (1988) *Manual for Beck Hopeless Scale*. San Antonio, TX: Psychological Corp.
- Bernstein, E. M., & Putnam, F. W. (1986) Development, reliability, and validity of dissociation scale. *Journal of Nervous and Mental Disease*, **174**, 727-735.
- Brennan, K. A., Clark, C. L., & Shaver, P. R. (1998) Self-report measurement of adult attachment: An integrative overview. In J. A. Simpson, & W. S. Rholes (Eds), *Attachment theory and close relationships*. New York: The Guilford Press, pp. 46-76.
- Brodman, K., Erdmann, A. J., Lorge, I., & Wolff, H. G. (1949) The Cornell Medical Index: An adjunct to medical interview. *Journal of the American Medical Association*, **140**, 530-534.
- Buss, A. H., & Perry, M. (1992) The aggression questionnaire. *Journal of Personality and Social Psychology*, **63**, 452-459.
- Carlson, E. B., & Putnam, F. W. (1993) An update on the Dissociative Experiences Scale. *Dissociation*, **6**, 16-27.
- Carver, C. S., & White, T. L. (1994) Behavioral inhibition, behavioral activation, and affective responses to impending reward and punishment: The BIS/BAS scale. *Journal of Personality and Social Psychology*, **67**, 319-333.
- Conte, H., Plutchik, R., Karasu, T., & Jerrett, I. (1980) A self-report Borderline Scale: Discriminative validity and preliminary norms. *Journal of Nervous and Mental Dis-*

- ease, 168, 428-435.
- Davis, M. H. (1980) A multidimensional approach to individual differences in empathy. *JSAS Catalog of Selected Documents in Psychology*, 10, 85.
- Davis, M. H. (1983) Measuring individual differences in empathy: Evidence for a multidimensional approach. *Journal of Personality and Social Psychology*, 44, 113-126.
- Diener, E., Emmons, R. A., Larsen, R. J. & Griffin, S. (1985). The satisfaction with life scale. *Journal of Personality Assessment*, 49, 71-75.
- 藤井 勉・山田琴乃・上淵 寿・利根川明子 (2011) 愛着の内的作業モデルを測定する試み. 日本認知心理学会第9回大会発表論文集, 104.
- 藤本 学・大坊郁夫 (2007) コミュニケーション・スキルに関する諸因子の階層構造への統合の試み. パーソナリティ研究, 15, 347-361.
- 福田一彦・小林重雄 (1973) 自己評価式抑うつ尺度の研究. 精神神経学雑誌, 75, 673-679.
- 福井義一 (2007a) 認知された養育態度と愛着型が解離性体験に及ぼす影響. 第6回日本トラウマティック・ストレス学会プログラム・抄録集, 87.
- 福井義一 (2007b) 愛着型や養育態度と解離性体験の関連—愛着と養育態度の二次元モデルの観点から—. 日本心理臨床学会第26回大会発表論文集, 474.
- 福井義一 (2007c) 青年期における病的解離と養育態度, 愛着型の関係. 日本催眠医学心理学会第53回大会プログラム・抄録集, 30.
- 福井義一 (2008) 成人愛着スタイルと解離性体験, 心理的健康の関連について—クラス分析によるサブタイプ抽出の観点から—. 日本催眠医学心理学会第54回大会, 58-60.
- 福井義一 (2010) 成人愛着スタイルと解離性体験, 及び心理的健康の関連. 催眠学研究, 52(1・2), 17-27.
- 福井義一 (2013a) 過剰適応が怒りの表出・抑制を介して IBS 傾向に及ぼす影響—青年期アナログ研究—. 日本健康心理学会第26回大会発表論文集, 96.
- 福井義一 (2013b) 日本人の伝統的な風習が精神的健康や幸福感に及ぼす影響(1)—風習の頻度を測定する尺度の作成及びその信頼性と妥当性の検討—. 関西心理学会第125回大会発表論文集, 38.
- 福井義一 (2014a) 青年期における過剰適応と怒りの表出・抑制, IBS 傾向の関連の再検討—性別による効果の違いの検証—. 日本健康心理学会第27回大会発表論文集, 57.
- 福井義一 (2014b) 虐待的な養育環境と完全主義, 自己愛と抑うつとの関連—クラス分析によるサブタイプの抽出—. 日本教育心理学会第56回総会発表論文集, 239.
- 福井義一 (2014c) 日本人の伝統的な風習が精神的健康や幸福感に及ぼす影響(2)—性差の検討—. 関西心理学会第126回大会発表論文集, 39.
- 福井義一 (2015a) どのような解離性の体験が病的解離を予測するか?—包括的解離尺度を用いて—. 日本 EMDR 学会第10回学術大会抄録集, 21.
- 福井義一 (2015b) 風習は不安になりやすい人の不適応を緩和できるか?—日本人の伝統的な風習が精神的健康や幸福感に及ぼす影響(3)—. 関西心理学会第127回大会発表論文集, 76.
- 福井義一 (2016a) 風習は依存しやすい人の不適応を緩和できるか?—日本人の伝統的な風習が精神的健康や幸福感に及ぼす影響(4)—. 関西心理学会第128回大会発表論文集, 88.
- 福井義一 (2016b) 被虐待経験と愛着, ストレッサーが IBS 傾向に及ぼす影響—青年期アナログ研究—. 日本健康心理学会第29回大会発表論文集, 170.
- 福井義一・松尾和弥・大浦真一 (2016a) 被虐待経験と愛着の内的ワーキング・モデルが過敏性腸症候群 (IBS) 傾向に及ぼす影響. 心身医学, 56(6), 655.
- Fukui, Y., Matsuo, K., & Oura, S. (2016b) Effects of abuse experiences and internal working models of attachment on somatic symptoms. Poster presented in The 31st International Congress of Psychology 2016.
- Fukui, Y., Matsuo, K., & Oura, S. (2016c) Effects of anxiety sensitivity and dissociation on somatic symptoms: Gender difference. Poster presented in The 31st International Congress of Psychology 2016.
- Fukui, Y., Matsuo, K., & Oura, S. (2016d) Is there a relationship between childhood abuse and insecure attachment with Irritable Bowel Syndrome? Gender differences in healthy Japanese adolescents. Proceedings of the 17th Asian Congress on Psychosomatic Medicine, 71.
- 福井義一・西村日出香・不破崇晴・宮本邦夫 (2011) Anxiety Sensitivity Index-3 日本語版の信頼性と妥当性の検討. 日本心理学会大会第75回発表論文集, 400.
- 福井義一・野村早也佳 (2009) 虐待的養育環境と心身の解離がアレキシサイミア傾向を介して心身症状に及ぼす影響. 日本臨床催眠学会第11回学術大会,
- 福井義一・野村早也佳 (2010) 知覚された虐待的養育環境と成人愛着スタイル, 解離傾向の関係—それらの組み合わせが精神的・身体的症状に及ぼす影響—. 第9回日本トラウマティック・ストレス学会大会プログラム・抄録集, 104.
- 福井義一・野村早也佳・小澤幸世・田辺 肇 (2010) 虐待的養育環境と心身の解離傾向, アレキシサイミア傾向及び心身の健康の関連. 感情心理学研究, 18(1), 25-32.
- 福井義一・大浦真一 (2015) 成人愛着の顕在・潜在的側面は一致しているか? その1—顕在・潜在愛着スタイルの検討—. 日本パーソナリティ心理学会第24回大会発表論文集, 115.
- 福井義一・大浦真一・岡田麻侑 (2013) 虐待的な養育環境と完全主義, 自己愛が抑うつに及ぼす影響—青年期アナログ群における検討—. 日本教育心理学会第55回総会発表論文集, 469.
- Fukui, Y., & Tanabe, H. (2014) Development of a scale for measuring the subjective aspects of dissociative experiences. Proceedings of ESTD 2014 Conference, 66.

- 福井義一・田辺 肇 (2015a) 包括的な解離体験と空想の関連その1－空想傾向と空想内容の検討－. 第14回日本トラウマティック・ストレス学会プログラム・抄録集, 127.
- 福井義一・田辺 肇 (2015b) 青年期における包括的な解離性体験と空想の関連 その2－空想に対する認識, 空想の役割・影響, 空想する状況の検討－. 日本心理臨床学会第34回大会, 475.
- Fukui, Y., & Tanabe, H. (2016) Effects of the experiences of abuse and insecure attachment on dissociative tendencies in healthy adolescents. *Proceedings of ESTD 2016 Conference*, 188.
- 福井義一・田辺 肇・西村麻美・道満ゆず子 (2014a) 包括的な解離傾向尺度作成の試み－再検査信頼性の検討－. 第13回トラウマティック・ストレス学会プログラム・抄録集, 111.
- 福井義一・田辺 肇・西村麻美・道満ゆず子 (2014b) 包括的な解離傾向尺度の短縮版の作成－青年期アナログ研究－. 日本心理臨床学会第33回大会発表論文集, 306.
- 福井義一・上田英一郎・田辺 肇・小澤幸世 (2014) 日本語版「医学的に説明のつかない皮膚症状」尺度の作成－精神・身体表現性解離との関連－. *心身医学*, **54**(6), 628.
- 福井義一・山下由紀子 (2012) 自己志向的完全主義尺度の因子構造と構成項目の再検討. 甲南大学紀要文学編, **162**, 117-127.
- 福島春子・胡桃澤 伸・田中 究・安 克昌 (未公刊) SDQ-20 日本語版. 神戸大学医学部精神神経科.
- Garner, D. M., & Garfinkel, P. E. (1979) The eating attitude test: An index of symptoms of anorexia nervosa. *Psychological Medicine*, **9**, 273-279.
- Garner, D. M., Olmstead, M. P., Bohr, Y., & Girkinkel, P. E. (1982) The eating attitude test: psychometric features and clinical correlates. *Psychological Medicine*, **12**, 871-878.
- Goldberg, D. P. (1978) *The General Health Questionnaire*. London: GL Assessment Limited. (中川泰彬・大坊郁夫 (訳) (1985) 日本版 GHQ 精神 健康調査票手引. 日本文化科学社.)
- 後藤和史・小玉正博・佐々木雄二 (1999) アレキシサイミアは一次元的特性なのか?－2子モデルアレキシサイミア質問紙の作成－. 筑波大学心理学研究, **21**, 163-172.
- Greenwald, A. G., McGhee, D. E., & Schwartz, J. L. K. (1998) Measuring individual differences in implicit cognition: The implicit association test. *Journal of Personality and social psychology*, **74**, 1464-1480.
- 比嘉勇人 (2002) Spirituality 評定尺度の開発とその信頼性・妥当性の検討. 日本看護科学会誌, **22**, 29-38.
- 平野真理 (2010) レジリエンスの資質的要因・獲得の分類試み－二次元レジリエンス要因尺度 (BRS) の作成－. パーソナリティ研究, **19**, 94-106.
- 平野真理 (2011) 中高生における二次元レジリエンス要因尺度 (BRS) の妥当性－双生児法を用いて－. パーソナリティ研究, **20**, 50-52.
- 堀井俊章・小川捷之 (1996) 対人恐怖心性尺度の作成. 上智大学心理学年報, **20**, 55-65.
- 堀井俊章・小川捷之 (1997) 対人恐怖心性尺度の作成 (続報). 上智大学心理学年報, **21**, 43-51.
- 細澤 仁 (2008) 解離性障害の治療技法. みすず書房.
- 今井田貴裕・大浦真一・松尾和弥・福井義一 (2016a) 健康生成モデルにおいて首尾一貫感覚とレジリエンスがストレス反応に及ぼす影響その1－調整効果の検討－. 第5回日本ポジティブサイコロジー医学学会学術集会プログラム抄録集, 32.
- 今井田貴裕・大浦真一・松尾和弥・福井義一 (2016b) 健康生成モデルにおいて首尾一貫感覚とレジリエンスがストレス反応に及ぼす影響その2－クラスタ分析を用いて－. 日本健康心理学会第29回大会発表論文集, 69.
- 石津憲一郎 (2006) 過剰適応尺度作成の試み. 日本カウンセリング学会第39回大会発表論文集, 137.
- 板津裕己 (1992) 生き方の研究－尺度構成と自己態度との関わりについて－. *カウンセリング研究*, **25**, 85-93.
- 岩佐 一・権藤恭之・増井幸恵・稲垣宏樹・河合千恵子・大塚理加・小川まどか・高山 緑・藺牟田洋美・鈴木隆雄 (2007) 日本語版「ソーシャル・サポート尺度」の信頼性ならびに妥当性－中高年を対象とした検討－. 厚生学の指標, **54**, 26-33.
- 角野善司 (1994) 人生に対する満足尺度 (the Satisfaction With Life Scale (SWLS)) 日本版作成の試み. 日本教育心理学会総会発表論文集, 192.
- 角田 豊 (1991) 共感経験尺度の作成. 京都大学教育学部紀要, **37**, 248-258.
- 角田 豊 (1992) 共感経験尺度の妥当性－VTR を刺激とした感情内容別検討－. 教育心理学研究, **40**, 178-184.
- 角田 豊 (1994) 共感経験尺度改訂版 (EERS) の作成と共感性の類型化の試み. 教育心理学研究, **42**, 193-200.
- 上地雄一郎・宮下一博 (2005) コフォートの自己心理学に基づく自己愛的脆弱性尺度の作成. パーソナリティ研究, **14**, 89-91.
- 上地雄一郎・宮下一博 (2009) 自己愛的脆弱性尺度の妥当性の検討－友人関係への影響の検討を通して－. 岡山大学大学院教育学研究科研究集, **140**, 1-6.
- 神村栄一・海老原由香・佐藤健二・戸ヶ崎泰子・坂野雄二 (1995) 対処方略の三次元モデルの検討と新しい尺度 (TAC-24) の作成. 教育相談研究, **33**, 41-47.
- 金久卓也・深町 建 (1972) CMI コーネルメディカルインデックス: その解説と資料. 三京房.
- 金子一史 (1999) 被害妄想的心性と他者意識及び自己意識との関連について. 性格心理学研究, **8**, 12-22.
- 金子一史 (2000) 青年期心性としての自己関係づけ. 教育心理学研究, **48**, 473-480.
- 加藤和生 (1998/1999) Bartholomew らの4分類成人愛

- 着尺度 (RQ) の日本語版の作成. 認知・体験過程研究, **7**, 41-50.
- 加藤 司 (2000) 大学生用対人ストレスコーピング尺度の作成. 教育心理学研究, **48**, 225-234.
- 金児暁嗣 (1998) 宗教と心理的充足感. 濱口恵俊 (編) 世界のなかの日本型システム. 新曜社, pp. 301-329.
- 菊池章夫 (1988) 思いやりを科学する—向社会的行動の対人スキル. 川島書店.
- 小林麻里子・駒沢あさみ・竜崎春佳・浅野憲一 (2012) 大学生の IBS 傾向と IBS 症状への対処方略の関連の検討. 日本心理学会大会第76回発表論文集, **299**.
- 今野裕之・堀 洋道 (1998) 正当世界信念が社会状況の不正判断に及ぼす影響について. 筑波大学心理学研究, **20**, 157-162.
- 河野和明 (2000) 自己隠蔽尺度 (Self-Concealment Scale) ・刺激希求尺度・自覚的身体症状の関連. 実験社会心理学研究, **40**, 115-121.
- 高坂康雅 (2008) 自己の重要領域からみた青年期における劣等感の発達の变化. 教育心理学研究, **56**, 218-229.
- 久木山健一 (2002) 情動コンピテンスと社会的情報処理の関連—アサーション行動を対象として—. カウンセリング研究, **35**, 66-75.
- Larson, D. G., & Chastain, R. L. (1990) Self-concealment: Conceptualization, measurement, and health implications. *Journal of Social and Clinical Psychology*, **9**, 439-455.
- Levenson, M. R., Kiehl, K. A., & Fitzpatrick, C. M. (1995) Assessing Psychopathic attributes in noninstitutionalized population. *Journal of Personality and Social Psychology*, **68**, 151-158.
- Liotti, G. (1992) Disorganized/disoriented attachment in the etiology of the dissociative disorders. *Dissociation*, **5**, 196-204.
- Liotti, G., Mollon, P., & Miti, G. (2005) Dissociative disorders. In G. O. Gabbard, J. S. Beck, & Holmes, J. (Eds.), *Oxford Textbook of Psychotherapy*. Oxford University Press. pp. 205-213.
- Lyons-Ruth, K. (2003) Dissociation and the parent-infant dialogue: A longitudinal perspective from attachment research. *Journal of the American Psychoanalytic Association*, **51**, 883-911.
- Lyubomirsky, S., & Lepper H. S. (1999) A measure of subjective happiness: Preliminary reliability and construct validation. *Social Indicator Research*, **46**, 137-155.
- Main, M., & Solomon, J. (1986) Discovery of a new insecure-disorganized/disoriented attachment pattern. In T. B. Brazelton, & M. W. Yogman (Eds.), *Affective Development in Infancy*. Ablex. pp. 95-124.
- Main, M., & Solomon, J. (1990) Procedures for identifying infants as disorganized / disoriented during the Ainsworth Strange Situation. In M. T. Greenberg, D. Cicchetti, E. M. Cummings. (Eds.), *Attachment in Preschool Years: Theory, Research, and Intervention 1*. The University of Chicago Press. pp. 121-160.
- 舛田亮太・中村俊哉 (2005) 日常的解離尺度 (6項目短縮版), 日常的解離分割投影尺度 (8項目短縮版) の構成概念妥当性の検討. パーソナリティ研究, **13**, 208-219.
- 町沢静夫・佐藤寛之 (1990) 境界型人格障害の内的メカニズムの検討—ボーダーライン・スケールと臨床体験からの分析—. 精神医学, **32**, 1179-1185.
- 松井めぐみ・小玉正博 (2001) 多面的空想特徴質問紙作成の試み—空想活動・認識・内容の分析—. 日本心理学会第65回大会発表論文集, **945**.
- 松井めぐみ・小玉正博 (2004) 空想の多面的特徴と精神的健康の関連. 健康心理学研究, **17**, 38-36.
- 松尾和弥・大浦真一・福井義一 (2016a) 被虐待経験とサイコパシー傾向が身体症状に及ぼす影響. 第58回日本心身医学会近畿地方会・第45回近畿地区講習会プログラム・抄録集, **41**.
- 松尾和弥・大浦真一・福井義一 (2016b) 被虐待経験とアレキシサイミア傾向が身体症状に及ぼす影響—アレキシサイミア傾向の媒介・調整効果—. 心身医学, **56(6)**, 671.
- 松尾和弥・大浦真一・福井義一 (2016c) 被虐待経験と愛着の内的作業モデルが抑うつと対人ライフイベントに及ぼす影響. パーソナリティ心理学会第24回大会発表論文集, **89**.
- 松尾和弥・大浦真一・福井義一 (2016d) 被虐待経験と愛着の内的作業モデルが精神的不健康に及ぼす影響. 日本健康心理学会第29回大会発表論文集, **173**.
- Meyer, T., Miller, M. L., Metzger, R. L., & Borkovec, T. D. (1990) Development and validation of the Penn State Worry Questionnaire. *Behavior Research and Therapy*, **28**, 487-495.
- 森本哲介・高橋 誠 (2013) 特性としての長所の主観的な活用感が精神的健康に及ぼす影響. 立正大学心理学研究年報(4), **109-116**.
- 本岡寛子・松見淳子・林 敬子 (2009) 「心配」の自己評定式質問紙—Penn State Worry Questionnaire—. カウンセリング研究, **42**, 247-255.
- 三原 亘 (1998) 共感性尺度の認知的側面に関する一研究. 性格心理学研究, **6**, 152-153.
- 宮岡 等 (1991) 心身症の発症機序と病態における alexithymia の意義に関する研究. 厚生省精神・神経疾患委託研究 心身症の発症機序と病態に関する研究 平成2年度研究成果報告書.
- 諸井克英 (1985) 高校生における孤独感と自己意識. 心理学研究, **56**, 237-240.
- 諸井克英 (1987) 大学生における孤独感と自己意識. 実験社会心理学研究, **26**, 151-161.
- 諸井克英 (1991) 改訂版 UCLA 孤独感尺度の次元性の検討. 静岡大学文学部人文論集, **42**, 23-51.
- Mukai, T., Crago, M., & Shisslak, C. A. (1994) Eating attitudes and weight preoccupation among female high school student in Japan. *Journal of Child Psychology and Psychiatry*, **35**, 677-688.

- Müller, M. M. (1993) Fragebogen zur Erfassung des habituellen Argerausdrucks: Das Müller Anger Coping Questionnaire (MAQ). *Zeitschrift für Diagnostische and Differentielle Psychologie*, **14**, 205-219.
- 永井 智・新井邦二郎 (2007) 利益とコストに対する認知が中学生における友人に対する相談行動へ与える影響の検討. *教育心理学研究*, **55**, 197-207.
- 永井 智・新井邦二郎 (2008) 相談行動の利益・コスト尺度改訂版の作成. *筑波大学心理学研究*, **35**, 49-55.
- 内藤まゆみ・鈴木佳苗・坂本 章 (2004) 情報処理スタイル (合理性一直観性) 尺度の作成. *パーソナリティ研究*, **13**, 67-78.
- 中村俊哉 (2003) 解離と分割についての覚書: 日常的な解離尺度, 空想対話尺度, 日常的な分割投影尺度の作成. *福岡教育大学紀要*, **52**, 213-226.
- 中尾達馬・加藤和生 (2004) “一般他者”を想定した愛着スタイル尺度の信頼性と妥当性の検討. *九州大学心理学研究*, **5**, 19-27.
- 成田健一・下仲順子・中里克治・河合千恵子・佐藤真一・長田由紀子 (1995) 特性的自己効力感尺度の検討—生涯発達の利用の可能性を探る—. *教育心理学研究*, **43**, 306-314.
- 日本消化器病学会 (編) (2014a) 機能的消化管疾患診療ガイドライン2014—過敏性腸症候群 (IBS). 南江堂.
- 日本消化器病学会 (編) (2014b) 機能的消化管疾患診療ガイドライン2014—機能的ディスペプシア (FD). 南江堂.
- Nijenhuis, E. R. S. (2004) *Somatoform Dissociation: Phenomena, measurement, & theoretical issues*. New York. W. W. Norton & Company.
- Nijenhuis, E. R. S., Spinhoven, P., Van Dyck, R., Van der Hart, O., & Vanderlinden, J. (1996) The development and psychometric characteristics of the Somatoform Dissociation Questionnaire (SDQ-20). *The Journal of Nervous and Mental Disease*, **184**, 688-694.
- 野村早也佳・福井義一 (2009) 虐待的な養育環境が心身の不健康に及ぼす影響—精神的解離と身体表現性解離を介して—. *日本催眠医学心理学会第55回大会プログラム・抄録集*, 39.
- 小川雅美 (1991) PBI (Parental Bonding Instrument) 日本版の信頼性, 妥当性に関する研究. *精神科治療*, **6**, 1193-1201.
- 岡田 努 (2002) 現代大学生の「ふれ合い恐怖心性」と友人関係の関連についての考察. *性格心理学研究*, **10**, 69-84.
- 岡田麻侑・道満ゆず子・西村麻美・大浦真一・福井義一・鈴木直人 (2012) 虐待的養育環境と成人愛着スタイルが感情調節と共感性に及ぼす影響その2—共感性を従属変数として—. *関西心理学会第127回大会発表論文集*, 54.
- 岡田麻侑・大浦真一・福井義一 (2013) 虐待的養育環境と愛着スタイルが感情調節と共感性に及ぼす影響の再検討(2): 共感性を従属変数として. *日本教育心理学会第55回総会発表論文集*, 472.
- 大石史博・福田美由紀・篠置昭男 (1987) ナルシシズムの人格の基礎的研究(1)—ナルシシズムの人格目録の信頼性と妥当性について. *日本教育心理学会第29回総会発表論文集*, 534-535.
- 大隅尚広・金山範明・杉浦義典・大平英明 (2007) 日本語版一次性・二次性サイコパシー尺度の信頼性と妥当性の検討. *パーソナリティ研究*, **16**, 117-120.
- 大竹恵子・島井哲志・曾我祥子・宇津木成介・山崎勝之・大芦 治・坂井明子・西 信雄・松島由美子・嶋田洋徳・安藤明人 (2000) 日本版 Müller Anger Coping Questionnaire (MAQ) の作成と妥当性・信頼性の検討. *感情心理学研究*, **7**, 13-24.
- 大浦真一・福井義一 (2014a) 虐待的養育環境が自己愛を介して共感性に及ぼす影響—青年期アナログ研究—. *第13回日本トラウマティック・ストレス学会プログラム・抄録集*, 116.
- 大浦真一・福井義一 (2014b) 青年期において虐待的養育環境と自己愛が共感性に及ぼす影響—クラスタ分析による検討—. *日本心理臨床学会第33回大会発表論文集*, 530.
- 大浦真一・福井義一 (2014c) 顕在・潜在的内的作業モデルの一致・不一致と感情調節との関連—潜在連合テスト (Implicit Association Test) を用いた検討—. *日本心理学会第78回大会発表論文集*, 58.
- 大浦真一・福井義一 (2014d) 顕在・潜在的内的作業モデルがライフイベントの経験頻度に及ぼす影響—潜在連合テスト (Implicit Association Test) を用いた検討—. *日本パーソナリティ心理学会第23回大会発表論文集*, 135.
- 大浦真一・福井義一 (2014e) 顕在・潜在的内的作業モデルが対人ストレスコーピングに及ぼす影響—潜在連合テスト (Implicit Association Test) を用いた検討—. *日本教育心理学会第56回総会発表論文集*, 546.
- 大浦真一・福井義一 (2014f) 青年期において顕在・潜在的内的作業モデルの一致・不一致が情動コンピテン스에及ぼす影響—潜在連合テスト (Implicit Association Test) を用いた研究—. *関西心理学会第126回大会発表論文集*, 64.
- 大浦真一・福井義一 (2014g) 回顧された虐待的養育環境と愛着の内的作業モデル, 感情調節との関連. *甲南大学臨床心理学研究*, **23**, 41-47.
- 大浦真一・福井義一 (2015a) 愛着の顕在・潜在的内的作業モデルが共感性に及ぼす影響—潜在連合テスト (IAT) を用いた検討—. *日本感情心理学会第23回大会プログラム*, 47.
- 大浦真一・福井義一 (2015b) 青年期アナログ群における虐待的養育環境と愛着の内的作業モデル, 自己愛との関連—構造方程式モデルを用いた検討—. *第14回日本トラウマティック・ストレス学会プログラム・抄録集*, 121.
- 大浦真一・福井義一 (2015c) 成人愛着の顕在・潜在的側面は一致しているか? その2—顕在潜在関係不安と顕在潜在回避の検討—. *日本パーソナリティ心理学会第24回大会発表論文集*, 116.

- 大浦真一・福井義一 (2015d) 虐待的養育環境と愛着スタイルが自己愛と精神的健康に及ぼす影響—青年期アナログ群における調査研究—. 日本心理臨床学会第34回大会発表論文集, 616.
- 大浦真一・福井義一 (2016) 対人ストレスと愛着の内的作業モデルが心身の健康に及ぼす影響その2—調整効果の性差の検討—. 日本心療内科学会誌, 20, 104.
- 大浦真一・福井義一・松尾和弥 (2015) 顕在・潜在的内的作業モデルが自己愛に及ぼす影響—潜在連合テスト (Implicit Association Test) を用いた検討—. 日本心理学会第79回大会発表論文集, 70.
- 大浦真一・松尾和弥・福井義一 (2013) 青年期において愛着の顕在・潜在的内的作業モデルが抑うつに及ぼす影響—潜在連合テストを用いた検討—. 日本パーソナリティ心理学会第22回大会論文集, 82.
- 大浦真一・松尾和弥・福井義一 (2015a) 愛着の顕在・潜在的内的作業モデルの不一致の大きさと方向が抑うつに及ぼす影響. 日本社会心理学会第56回大会, 114.
- 大浦真一・松尾和弥・福井義一 (2015b) 愛着の顕在・潜在的内的作業モデルの不一致の大きさと方向が社会適応に及ぼす影響その1—情動コンピテンスを用いた検討—. 関西心理学会第127回大会発表論文集, 41.
- 大浦真一・松尾和弥・福井義一 (2016a) 愛着の顕在・潜在的内的作業モデルが不安感受性に及ぼす影響—潜在連合テストを用いた検討—. 日本心理学会若手の会若手心理学者の異分野間協働懇話会 キャンプセミナー2016—第2号通信・抄録集—, 7.
- 大浦真一・松尾和弥・福井義一 (2016b) 被虐待経験と愛着の顕在・潜在的内的ワーキング・モデルが身体症状に及ぼす影響—Implicit Association Test を用いた検討—. 心身医学, 56(6), 671.
- Oura, S., Matsuo, K., & Fukui, Y. (2016c) Effect of explicit/implicit internal working models on somatic symptoms. — Study by using Implicit Association Test—. Poster presented in The 6th Asian Congress of Health Psychology 2016.
- Oura, S., Matsuo, K., & Fukui, Y. (2016d) Effects of Internal Working Models of Attachment on Social Adaptation 1-From the perspective of congruity/incongruity of explicit and implicit aspects of IWM. Poster presented in The 31st International Congress of Psychology 2016.
- Oura, S., Matsuo, K., & Fukui, Y. (2016e) Effects of Internal Working Models of Attachment on Social Adaptation 2 -From the perspective of size and direction of discrepancy between explicit and implicit aspects of IWM. Poster presented in The 31st International Congress of Psychology 2016.
- 大浦真一・松尾和弥・福井義一 (2016f) 青年期において被虐待経験と愛着の顕在・潜在的内的作業モデルが共感性と社会的スキルに及ぼす影響—潜在連合テストを用いた検討—. 日本心理臨床学会第35回秋季大会, 335.
- 大浦真一・松尾和弥・福井義一 (2016g) 被虐待経験は男女で共感性に異なる影響を及ぼすのか? (1)—愛着の内的作業モデルの調整効果—. 日本パーソナリティ心理学会第24回大会発表論文集, 88.
- 大浦真一・松尾和弥・福井義一 (2016h) 被虐待経験は男女で共感性に異なる影響を及ぼすのか? (2)—愛着の内的作業モデルの媒介効果—. 日本社会心理学会第57回大会発表論文集, 400.
- 大浦真一・松尾和弥・福井義一 (2016i) 対人ストレスと愛着の内的作業モデルが心身の健康に及ぼす影響その1—男女別による媒介効果の検討—. 日本健康心理学会第29回大会発表論文集, 98.
- 大浦真一・松尾和弥・福井義一 (2016j) 青年期において愛着の内的作業モデルが希死念慮とうつに及ぼす影響—孤独感の媒介・調整効果の検討—. 日本情動学会第6回大会発表論文集, 21.
- 大浦真一・岡田麻侑・道満ゆず子・西村麻美・福井義一・鈴木直人 (2012) 虐待的養育環境と成人愛着スタイルが感情調節と共感性に及ぼす影響その1—ノンバーバル・スキルを従属変数として—. 関西心理学会第127回大会発表論文集, 53.
- 大浦真一・岡田麻侑・福井義一 (2013a) 虐待的養育環境が愛着の内的ワーキング・モデルを介して共感性に及ぼす影響の再検討—邦訳版 Child Abuse and Trauma Scale の再構成された下位尺度を用いて—. 第12回日本トラウマティック・ストレス学会プログラム・抄録集, 115.
- 大浦真一・岡田麻侑・福井義一 (2013b) 虐待的養育環境と愛着スタイルが感情調節と共感性に及ぼす影響の再検討(1)—感情調節を従属変数として—. 日本教育心理学会第55回総会発表論文集, 471.
- 大浦真一・岡田麻侑・福井義一 (2013c) 虐待的養育環境が愛着の内的ワーキングモデルを介してノンバーバル・スキルに及ぼす影響の再検討—邦訳版 Child Abuse and Trauma Scale の再構成された下位尺度を用いて—. 日本心理臨床学会第32回大会発表論文集, 648.
- 大浦真一・岡田麻侑・福井義一 (2013d) 虐待的養育環境が内的作業モデル、孤独感を介してノンバーバル・スキルに及ぼす影響—青年期アナログ群における調査研究—. 関西心理学会第125回大会発表論文集, 36.
- 大浦真一・岡田麻侑・福井義一 (2013e) 虐待的養育環境が内的作業モデルやノンバーバル・スキルと共感性を介して心身の問題に及ぼす影響の検討. 日本情動学会第3回大会発表論文集, 17.
- 小塩真司 (1998) 青年の自己愛傾向と友人関係のあり方との関連. 性格心理学研究, 8, 1-11.
- 小塩真司・中谷素之・金子一史・長峰伸治 (2002) ネガティブな出来事からの立ち直りを導く心理的特性—精神的回復力尺度の作成—. カウンセリング研究, 35, 57-65.
- Oshio, A., Kaneko, H., Nagamine, S., & Nakaya, M. (2003) Construct validity of the Adolescent Resilience Scale. *Psychological Reports*, 93, 1217-1222.
- 小澤幸世・田辺 肇・後藤和史 (2008) 身体表現型解離

- 尺度の検討—被虐待経験との関連から—。日本心理学会第72回大会発表論文集, 347.
- 尾関友佳子 (1990) 大学生のストレス自己評価尺度—質問紙構成と質問紙短縮について。久留米大学大学院紀要比較文化研究, **1**, 9-32.
- 尾関友佳子 (1993) 大学生用ストレス自己評価尺度の改訂—トランスアクションナルな分析に向けて—。久留米大学大学院比較文化研究科年報, **1**, 95-114.
- Paker, G., Tupling, H., & Brown, L. B. (1979) A parental bonding instrument. *British Journal of Psychiatry*, **134**, 138-147.
- Paulhus, D. L. (1984) Measurement and control of response bias. In J. P. Robinson, P. R. Shaver, & L. S. Wrightsman (Eds.), *Measure of personality and social psychological attitude*. New York: Academic Press. pp. 17-59.
- Radloff, S. R. (1977) The CES-D scale: A self-report depression scale for research in the general population. *Applied Psychology Measurement*, **1**, 385-401.
- Raskin, R., & Hall, C. S. (1979) A narcissistic personality inventory. *Psychological Reports*, **45**, 590.
- Roalfe, A. K., Roberts, L. M., & Wilson, S. (2008) Evaluation of the Birmingham IBS symptom questionnaire. *BMC Gastroenterology*, **8**, 30.
- Rorsenberg, M. (1965) *Society and the adolescent self-image*. Princeton Univ. Press.
- Rubin, Z., & Peplau, A. (1975) Who believes in a just world? *Journal of Social Issues*, **31**, 65-89.
- Russell, D., Peplau, L. A., & Cutrona, C. E. (1980) The revised UCLA Loneliness scale: Concurrent and discriminant validity evidence. *Journal of Personality and Social Psychology*, **39**, 472-480.
- Rushton, J. P., Chrisjon, R. D., & Fekkin, G. C. (1981) The altruistic personality and self-report altruism scale. *Personality and Individual Differences*, **2**, 293-302.
- 坂本真士 (1997) 自己注目と抑うつ心の社会心理学。東京大学出版会。
- 桜井茂男・大谷佳子 (1994) “自己に求める完全主義”と抑うつ傾向および絶望感との関係。心理学研究, **68**, 179-186.
- Sanders, B., & Becker-Lausen, E. (1995) The measurement of psychological mal-treatment: Early data on the Child Abuse and Trauma Scale. *Child Abuse & Neglect*, **19**, 315-323.
- Sanders, B., & Giolas, M. (1991) Dissociation and childhood trauma in psychologically disturbed adolescents. *American Journal of Psychiatry*, **148**, 50-54.
- 澤田匡人 (2003) 他者の不幸に対する感情喚起における妬み感情と相応度の役割。日本発達心理学会第14回大会発表論文集, 56.
- 澤田匡人 (2008) シャーデンフロイデの喚起に及ぼす妬み感情と特性要因の影響—罪悪感, 自尊感情, 自己愛に注目して—。感情心理学研究, **16**, 36-48.
- 澤田匡人 (2009) 小中学生のいじめに対する態度とシャーデンフロイデ。日本心理学会第73回大会発表論文集, 1010.
- Sawada, M., & Hayama, D. (2012) Dispositional vengeance and anger on schadenfreude. *Psychological Report*, **111**, 322-334.
- Shaver, P. R., & Mikulincer, K. (2004) What do self-report attachment measures assess? In W. S. Rholes, & J. A. Simpson (Eds.). *Adult attachment: Theory, research, and clinical implications*. New York: The Guilford Press. pp. 17-54.
- Sherer, M., Maddux, J. E., Mercandante, B., Prentice-Dunn, S., Jacobs, B., & Rogers, R. W. (1982) The self-efficacy scale: Construction and validation. *Psychological Reports*, **51**, 663-671.
- 島井哲志・大竹恵子・宇津木成介・池見 陽 & Sonja Lyubomirsky (2004) 日本版主観的幸福感尺度 (Subjective Happiness Scale: SHS) の信頼性と妥当性の検討。日本公衆衛生雑誌, **51**, 845-852.
- 嶋 信宏 (1992) 大学生におけるソーシャル・サポートの日常生活ストレスに対する効果。社会心理学研究, **7**, 45-53.
- 島 悟・鹿野達男・北村俊則・浅井昌弘 (1985) 新しい抑うつ性自己評価尺度について。精神医学, **27**, 717-723.
- 清水秀美・今栄国晴 (1981) STATE-TRAIT ANXIETY INVENTORY の日本語版 (大学生用) の作成。教育心理学研究, **29**, 348-353.
- 下坂 剛 (2001) 青年期の各学校段階における無気力感の検討。教育心理学研究, **49**, 305-313.
- 外山美樹 (2013) 楽観・悲観性尺度の作成ならびに信頼性・妥当性の検討。心理学研究, **84**, 256-266.
- Spielberger, C. D. (1988) *Manual for the State-Trait Anger Expression Inventory (STAXI)*. Odessa, FL: Psychological.
- Spielberger, C. D., Gorsuch, R. L., & Lushene, R. E. (1970) *STAI manual for the State-Trait Anxiety Inventory*. CA: Counseling Psychologist Press.
- 杉浦義典 (2009) アナログ研究の方法。新曜社。
- 杉浦義典・佐藤 徳 (2005) 日本語版 Primary and Secondary Psychopathy Scale の妥当性。日本心理学会第69回大会発表論文集, 407.
- 須永範明 (1996) 非現実感質問紙の作成。心理学研究, **67**, 86-93.
- 鈴木 平・春木 豊 (1994) 怒りと循環器系疾患の関連性の検討。健康心理学研究, **7**, 1-13.
- 鈴木有美・木野和代 (2008) 多次元共感性尺度 (MES) の作成—自己指向・他者指向の弁別に焦点を当てて—。教育心理学研究, **56**, 487-497.
- 高橋雄介・山形伸二・木島伸彦・繁榊算男・大野 裕・安藤寿康 (2007) Gray の気質モデル—BIS/BAS 尺度日本語版の作成と双生児法による行動遺伝学的検討。パーソナリティ研究, **15**, 276-289.
- 高比良美詠子 (1998) 対人・達成領域別ライフイベント尺度 (大学生用) の作成と妥当性の検討。社会心理学

- 研究, **14**, 12-24.
- 竹澤みどり・小玉正博 (2004) 青年期後期における依存性の適応的観点からの検討. *教育心理学研究*, **52**, 310-319.
- 滝間一嘉・坂元 章 (1991) 認知的熟慮性-衝動性尺度の作成-信頼性と妥当性の検討-. *日本グループダイナミクス学会第55回大会発表論文集*, 678.
- 田村修一・石隈利紀 (2001) 指導・援助サービス上の悩みにおける中学校教師の被援助志向性に関する研究-バーンアウトとの関連に焦点をあてて-. *教育心理学研究*, **49**, 438-448.
- 田村修一・石隈利紀 (2006) 中学校教師の被援助志向性に関する研究-状態・特性被援助志向性尺度の作成および信頼性と妥当性の検討-. *教育心理学研究*, **54**, 75-89.
- 田辺 肇 (1994) 解離性体験と心的外傷体験との関連-日本語版 DES (Dissociative Experiences Scale) の構成概念妥当性の検討. *催眠学研究*, **39**, 1-10.
- 田辺 肇 (1996) 解離傾向と心的外傷体験との関連-青年期女子における日本語版 DES (Dissociative Experiment Scale) と CATS (Child Abuse and Trauma Scale) の適用-. *日本心理学会第60回大会発表論文集*, 191.
- 田辺 肇 (2005) 思春期青年における解離性体験と心的外傷体験-日本語版 A-DES (Adolescent Dissociative Experiences Scal; 思春期・青年期解離性体験尺度) の一般中学・高校生における得点分布および自己報告された外傷的体験頻度との関連からみた構成概念妥当性-. *日本トラウマティック・ストレス学会第4回大会発表論文集*, 75.
- 田辺 肇・後藤和史・福井義一・小澤幸世・澤たか子・青木佐奈枝・大饗広之 (2013) 日本語版 CATS (Child Abuse and Trauma Scale) で捉えられるトラウマ歴の因子構造. *第12回日本トラウマティック・ストレス学会発表論文集*, 115.
- 田辺 肇・小川俊樹 (1992) 質問紙による解離性体験の測定-大学生を対象にした DES (Dissociative Experiences Scale) の検討. *筑波大学心理学研究*, **14**, 171-178.
- Tanaka, E., Sakamoto, S., Ono, Y., Fujihara, S., & Kitamura, T. (1998) Hopelessness in a community population in Japan. *Journal of Clinical Psychology*, **52**, 609-615.
- 谷 冬彦 (2001) 青年期における同一性の感覚の構造-多次元同一性尺度 (MEIS) の作成-. *教育心理学研究*, **49**, 265-273.
- 谷 伊織 (2008) バランス型社会的望ましさ反応尺度日本語版 (BIDR-J) の作成と信頼性・妥当性の検討. *パーソナリティ研究*, **17**, 18-28.
- Taylor, S., Zvoienky, M. J., Cox, B. J., Deacon, B., Heimberg, R. G., Ledley, D. R., Abramowitz, J. Z., Holaway, R. M., Sendin, B., Stewart, B., Coles, M., Eng, E. S., Daly, E. S., Arrindell, W. A., Bouvaard, M., & Cardenas, S. J. (2007) Robust dimensions of anxiety sensitivity: development and initial validation of the Anxiety Sensitivity Index-3. *Psychological Assessment*, **19**, 176-188.
- 田崎美弥子・中根允文 (1997) WHOQOL26 手引き改訂版. 金子書房.
- 辻 平治郎 (1989) 他者の内面への関心, 外面への関心, および空想的関心: 他者意識概念の明確化とその測定. *甲南女子大学人間科学報*, **14**, 31-48.
- 辻 平治郎 (1992) 完全主義の構造とその測定尺度の作成. *甲南女子大学人間科学年報*, **17**, 1-14.
- 辻 平治郎 (1993) 自己意識と他者意識. 北大路書房.
- 杉浦義典・佐藤 徳 (2005) 日本語版 Primary and Secondary Psychopathy Scale の妥当性. *日本心理学会第69回大会発表論文集*, 407.
- Waller, N. G., Putnam, F. W., & Carlson, E. B. (1996) Types of dissociation and dissociative types: A taxometric analysis of dissociative experiences. *Psychological Methods*, **1**, 300-321.
- Waller, N. G., & Ross, C. A. (1997) The prevalence and biometric structure of pathological dissociation in the general population: Taxometric structure and behavior genetic findings. *Journal of Abnormal and Social Psychology*, **106**, 499-510.
- 和田 実 (1992) ノンバーバルスキル尺度およびソーシャルスキル尺度の改訂. *東京学芸大学紀要*, **43**, 123-136.
- 山本真理子・松井 豊・山成由紀子 (1982) 認知された自己の諸側面. *教育心理学研究*, **30**, 64-68.
- 山下利之・長縄久生 (2012) 心の硬さの測定とその応用. *知能と情報*, **24**, 827-835.
- 山崎喜比古・戸ヶ里泰典・坂野純子編 (2008) ストレス対処能力 SOC. 有信堂高文社.
- Zimet, Dahlem, Zimet, & Farley (1988) The Multidimensional Scale of Perceived Social Support. *Journal of Personality Assessment*, **52**, 30-41.
- Zung, W. W. K. (1965) A self-rating depression scale. *Archives of General Psychiatry*, **12**, 63-70.